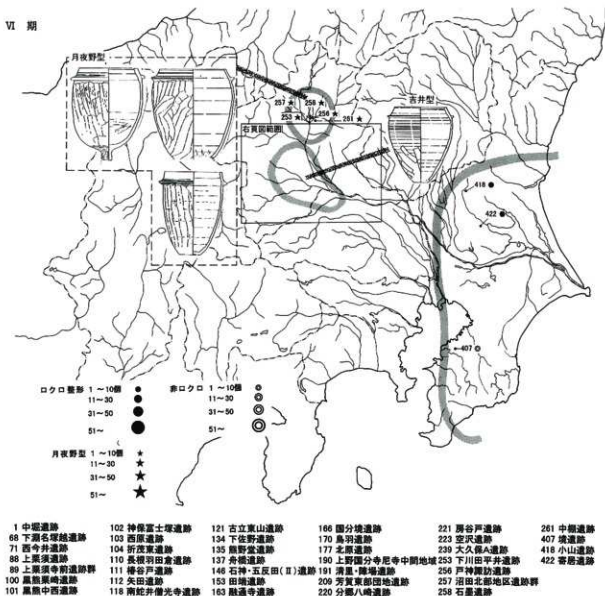


第891図 関東甲信地方羽釜分布図(1)

VI 期



遡るものは非常に少ないと思われる。はっきりとした根拠はないが、初期の月夜野型羽釜に伴出する土器群は、若干吉井型羽釜のそれより古い印象である。

吉井型羽釜のもっとも古い一群には下佐野遺跡Ⅰ地区78号住居(第896図)のように、石墨遺跡や下川田平井遺跡の羽釜の形態と類似する例がみられることから、月夜野型羽釜の一部が、吉井型羽釜の生産開始時に、何らかの影響を与えたものと考えられる。

もっとも、この吉井型羽釜に類似する月夜野型羽釜の出土量は非常に少ない。月夜野型羽釜の主体は、底

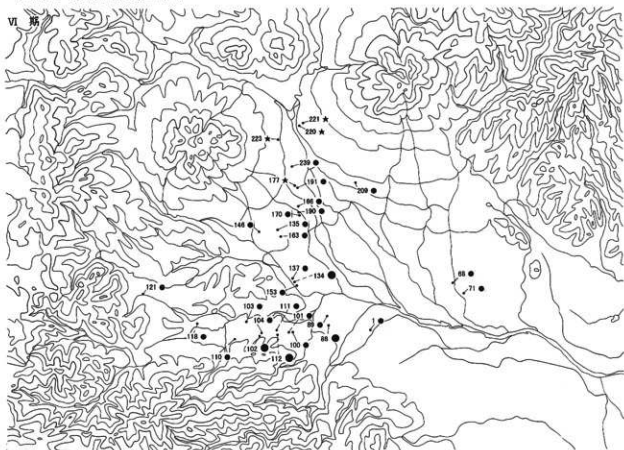
部が大きく、鑄部を境に屈曲し、口縁部は直立する形態のものである。

また、吉井型羽釜のプロポーションは、出現段階(Ⅵ期)から多様であり、胴部のヘラケズリをほとんど施さないなど、月夜野型羽釜との相違点もかなりある。

吉井型羽釜が上野以外で分布しているのは、中郷遺跡(1)だけであり、土師器壺が卓越する北武蔵のなかで、いち早く上野で生産された煮炊具を使用していることは注目される。

中郷遺跡では、Ⅲ期に造営された寺院関連建物(第

第892図 羽釜分布拡大図(1)



1～3号建物地形跡)に葺かれていた軒九瓦の瓦当文様が、群馬県吉井町黒熊中遺跡(101)のものと同様であるなど、集落成立当初から上野との交流が極めて深かったことをうかがわせる。

このような上野との繋がりや深さが、日常什器である煮炊具の採用にも影響し、Ⅵ期での羽釜の使用とあって現れたと考えられる。

中壩Ⅵ期(第893・894図)

Ⅵ期としたが、前述の通りもう少し時間幅を考慮して、10世紀世紀前半と考えてもよいであろう。

この段階では、関東甲信地方の広い範囲で、様々なタイプの羽釜がみられるようになる。

月夜野型・吉井型以外にも、甲斐では甲斐型土器の器種構成の中に、羽釜が確実に組み込まれて存在する。

この羽釜の分布は、国府周辺を中心とするが、信濃との国境に近い、北巨摩郡にまで広範囲にみられる。

甲斐型土器の羽釜は、甲斐型の甕と同じように、ハケにより整形され、胎土も同じである。一定量の出土がみられるが、甕の出土量には遠く及ばず、煮炊具の主体とはなっていない。

相模でも在地産土器の器種構成の一つとしてみられる。分布は南部の平塚市周辺以外では少量しかみられず、平塚市周辺の集落から、そのほとんどが出土している。

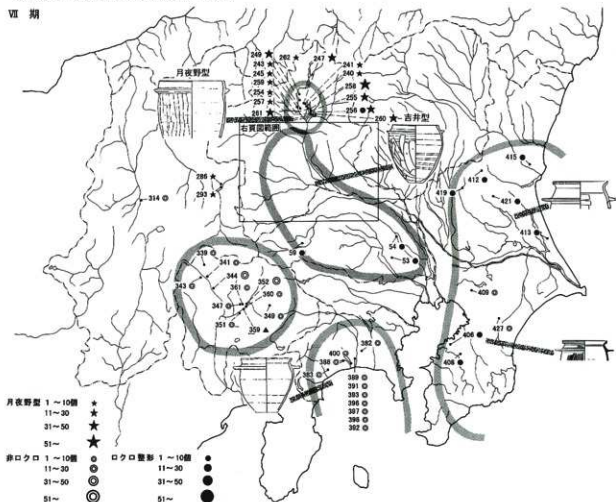
甲斐の羽釜同様に出土量は少なく、煮炊具の主体とはならない。

相模の羽釜には、口縁部がくの字に屈曲するものと、内湾気味のもの、弱く開くものの三者がある。

房総半島、常陸ではⅥ期にみられた、口縁部がくの字に屈曲する羽釜が引き続きみられる。Ⅵ期よりもやや広い範囲に分布するようになるが、出土量はとも少なく、甲斐や相模のように、少ないながらも、器種構

第893図 関東甲信地方羽釜分布図(2)

Ⅶ 期



- | | | | | | |
|-------------|---------------|--------------|---------------|--------------|------------|
| 1 中根遺跡 | 102 神保富士塚遺跡 | 154 前白遺跡 | 238 熊野遺跡 | 344 宮ノ前遺跡 | 413 野台遺跡 |
| 13 坂田遺跡 | 103 西原遺跡 | 160 露台(Ⅱ)遺跡 | 239 大久保A遺跡 | 347 桜井遺跡 | 415 武田遺跡 |
| 33 上敷先遺跡 | 106 多胡蛇馬遺跡 | 162 崎貫遺跡 | 240 後田遺跡 | 349 田野平遺跡 | 419 八幡前遺跡 |
| 36 北島遺跡 | 109 桑根遺跡 | 163 駒高寺遺跡 | 241 高平遺跡 | 351 石橋島新田遺跡 | 421 鹿の子C遺跡 |
| 41 堀ノ下遺跡 | 110 長根羽田倉遺跡 | 166 園分橋遺跡 | 243 新中原遺跡 | 352 一ノ宮町埋没倉庫 | 427 山田水谷遺跡 |
| 53 林光寺遺跡 | 111 種谷芦田遺跡 | 168 小池遺跡 | 245 村主遺跡 | 359 二ノ宮遺跡 | |
| 54 大山遺跡 | 112 矢田遺跡 | 170 鳥羽遺跡 | 247 大竹遺跡 | 360 狐原遺跡 | |
| 59 地原遺跡 | 116 千足遺跡 | 177 北原遺跡 | 249 洲Ⅰ遺跡 | 361 松本塚/越遺跡 | |
| 68 下瀬名稲穂遺跡 | 117 田上平遺跡 | 179 下東西遺跡 | 254 芦神原Ⅱ遺跡 | 362 海老名本郷 | |
| 68 三ツ上遺跡 | 118 南蛇井稻光寺遺跡 | 190 上野園分寺尼寺 | 255 芦神原Ⅲ遺跡 | 363 水塚下り跡遺跡 | |
| 71 西ヶ井遺跡 | 120 本郷・堀土遺跡 | 中野地蔵 | 256 芦神原Ⅳ遺跡 | 366 向原遺跡 | |
| 77 上之平八王子遺跡 | 127 松井田工泉園地遺跡 | 191 清雲・藤塚遺跡 | 257 沼田北部地区遺跡群 | 369 富林寺遺跡 | |
| 78 神人村Ⅱ遺跡 | 130 西宮・西新井遺跡 | 192 清雲・長久保遺跡 | 258 石巻遺跡 | 391 山王台遺跡 | |
| 81 八幡遺跡 | 131 坂ノ下原遺跡 | 193 清雲南部遺跡群 | 259 大妻遺跡 | 392 森之宮下郷遺跡 | |
| 85 株木田遺跡 | 133 雨雲遺跡 | 199 大屋敷遺跡 | 260 永井宮前遺跡 | 393 森之宮天神前遺跡 | |
| 88 上瀬川遺跡 | 134 下野遺跡 | 209 芳賀東部陸地遺跡 | 261 中根遺跡 | 396 神明久保遺跡 | |
| 89 上原中前遺跡群 | 135 熊野堂遺跡 | 212 柳久保遺跡群 | 262 北員芦遺跡 | 397 諏訪前白遺跡 | |
| 96 白石大塚遺跡 | 137 赤橋遺跡 | 223 天遺跡 | 296 上宮橋遺跡 | 398 中原上宮遺跡 | |
| 97 堀ノ内遺跡群 | 142 新谷遺跡 | 229 白井二位屋遺跡 | 293 北山寺遺跡 | 400 中里三遺跡 | |
| 98 本郷山根遺跡 | 143 新保田中村前遺跡 | 230 八木原沖田Ⅰ遺跡 | 314 平田新田遺跡 | 406 永吉台遺跡群 | |
| 99 黒熊山崎遺跡 | 145 西島遺跡群 | 232 半田家跡遺跡 | 339 寺所遺跡 | 408 白幡前遺跡 | |
| 100 黒熊山崎遺跡 | 150 中尾遺跡 | 233 有馬遺跡 | 341 大豆生田遺跡 | 409 白幡前遺跡 | |
| 101 黒熊中西遺跡 | 153 田越遺跡 | 235 有馬東里遺跡 | 343 宮間田遺跡 | 412 原遺跡 | |

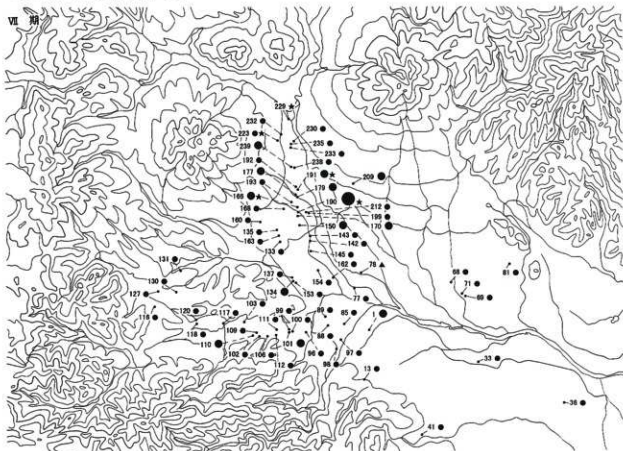
成の一翼を担うというようなことはない。

分布図にはドットを入れていないが、相模と房総半島から常陸にかけての地域には、羽釜の鈎に当たる部

分だけの、「釜輪」と呼ばれる土器が極少量みられる。

斐をこの「釜輪」にはめ込んで、羽釜のようにして使用したものと思われるが、極めて特殊なものである

第894図 羽釜分布拡大図(2)



といえる。

上野の羽釜には、Ⅵ期同様に、月夜野型と吉井型の二者がある。

月夜野型の羽釜は、出土する遺跡の数は増加するが、分布範囲はⅥ期とほとんど変わらない。

しかし、信濃の佐久平の上聖端遺跡(286)と北山寺遺跡(293)で、非常によく似たものが出土している(第895図)。実見したわけではないので断定はできないが、図でみる限り形態、整形技法ともに、月夜野型の特徴を示している。

また、上野国分寺・尼寺中間地域(190)でも出土している。このように、月夜野型本来の分布範囲を大きく逸脱するものは、二次的な流通と考えられ、単発的かつ小規模なものである。

月夜野型羽釜の分布の中心である、利根・水戸・吾妻地域では、Ⅵ期まで煮炊具の中心であった武蔵型甕

はほとんど姿を消し、羽釜が煮炊具の主体となる(第880・881図参照)。

吉井型羽釜を出土する遺跡は急増する。主な分布範囲は、Ⅵ期とそれほど変化せず、中心は利根川西岸と鏡川流域であるが、古利根川を下った、埼玉県の林光寺遺跡(53)、大山遺跡(54)など大宮台地にも少数みられるようになる。

両者の羽釜は、実見した限りでは吉井型と断定はできないが、ロクロ整形の感じや、鐶の様相、口縁端部の面取り、焼成がやや甘い点など、吉井型羽釜の影響下にあることは間違いない。

両遺跡のものとともに、口縁部が弱く外傾することから、甕とも考えられるが、甕としても吉井型の羽釜に伴う甕と類似する。

Ⅶ期には、それまで上野、武蔵を中心に広く分布していた武蔵型甕は、北武蔵から上野南部にその分布

範囲が狭まり、土器器型の地域色が強くなる。

大宮台地周辺でも、ロクロ整形釉化焙焼の甕が、土器器焼成坑といわれる簡易な焼成施設で生産されるようになる。林光寺遺跡や大山遺跡から出土した羽釜もこうした煮炊具の大きな変化に対応するものであろう。

吉井型羽釜の分布の中心である群馬県南西部では、遺跡数の増加もさることながら出土量が急増する。

特に生産地と思われる鉾川流域の遺跡よりも、国府を中心とした、遺跡からの出土の多さが目立つ。このように、国府周辺の集落から多く出土する傾向は、甲斐や相模でもみられたもので、この段階の土器の流通システムを考える上で注目される事象である。

羽釜の出土量は増加するが、前述の通りそれまで煮炊具の主体であった武蔵型甕が依然として、北武蔵から上野南部の範囲には多く分布する。

特に、北武蔵北部から上野南東部にかけては、この傾向が顕著であり、吉井型羽釜の進出を拒んでいるかのようにみえる。

また、利根川西岸の国府周辺の集落でも、羽釜が武蔵型甕を完全に凌駕したわけではなく、両者は共存しているのである。

このことは、この地域が古墳時代以降、煮炊具だけでなく、供膳具にも土器器が一定量使用され続けるといふ、非常に特殊な地域であることと無関係ではあるまい。

奈良平安時代を通じて、武蔵型甕や北武蔵型甕、さらに土器器杯A・Bを多量に且つ、広範囲に流通させ

た背景には、在地の強力な勢力の存在がうかがえる。

これら在地に根差した勢力を一度に払拭し、須恵器技術を使用する羽釜に一気に転換することは不可能であったのであろう。

先に国府を中心とする地域により羽釜が多く出土するという傾向を指摘したが、10世紀前半という時期は、在地勢力の拠点であった郡家はすでになくなり、国府を中心とした社会への再編成の時期であったと思われる。

社会背景のこのような変化が、土器生産体制にも少なからず影響を与え、次第に再編成されていったのである。その結果として、武蔵型甕から吉井型羽釜への転換が図られたのであろう。

中壇Ⅷ・Ⅸ期 (第897・898図)

Ⅷ期とⅨ期は、羽釜と供膳具の特徴だけでは、区別が困難で、まとめて扱う。年代的には10世紀後半である。

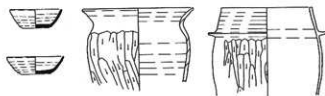
関東甲信地方での羽釜の最盛期である。

分布は信濃、南武蔵などにもみられるようになり、甲斐・相模では、出土する遺跡が増加する。逆に、房総半島や常陸では減少するが、もともと出土量が非常に少ないことから、あまり大きく変化していないと考えた方が妥当であろう。

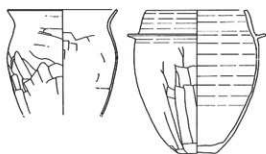
最盛期といっても、煮炊具の主体となり、多量に出土するのは、上野から北武蔵の一部(賀美・児玉郡など)だけの話で、ほかの地域ではⅧ期同様に、煮炊具の主体となることはなく、在地色の強い煮炊具が使用される(第882・883・884・885図参照)。

第895図 佐久平の10世紀前半の羽釜

佐久市北山寺遺跡3号住居



佐久市上聖城遺跡141号住居



月夜野型羽釜は、相変わらず利根・水上・吾妻の山間地域を中心として分布しているが、上野南部の平野部での出土例も増加している。

吉井型羽釜は、まさに爆発的といえる増加を示す。北武蔵北部・上野南部では、武蔵型甕の流れを引く土師器甕は、ほとんど払拭され煮炊具の主体は羽釜に取って代わる。

分布範囲も、西は佐久平、東は東毛地域にまで広がる。また、中武蔵といわれる、比企・入間地方にも分布がみられ、その延長線上の武蔵国府周辺でも少量みられる。

この段階になると、ロクロ整形が半断の難しい羽釜が一定量みられるようになる。分布図上に▲のドットで表したものがそれで、東毛地域に分布がやや偏る傾

向がある(南武蔵に分布するものは、吉井型羽釜ではなく在地の羽釜である)。

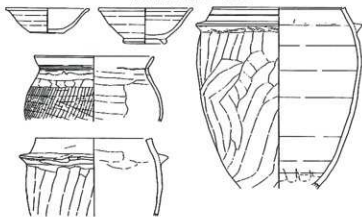
東毛地域には、確実にロクロ整形ではない羽釜が登場する。焼成もロクロ整形の羽釜のように甘い感じではなく、酸化焰焼成であるが、武蔵型甕のように堅く焼き締められるもので、吉井型羽釜とは一線を画すものである。近年「東毛型」と呼ばれているものであろう。(桜岡1997)

この東毛型の分布範囲は、非常に狭く、まさに「東毛」だけである。ただし、中壩遺跡から出土している、土師器の羽釜Aとしたものが、該当する可能性があり、今後、利根川対岸の妻沼低地付近で、出土する可能性が高い。

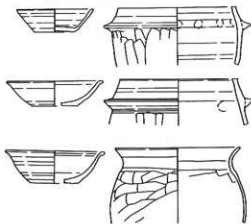
東毛型の羽釜は、分布範囲が狭いだけでなく、出土

第896図 10世紀初頭の羽釜

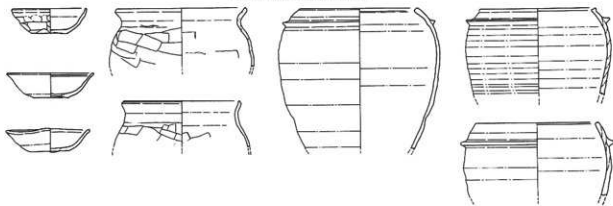
沼田市石屋遺跡B区12号住居



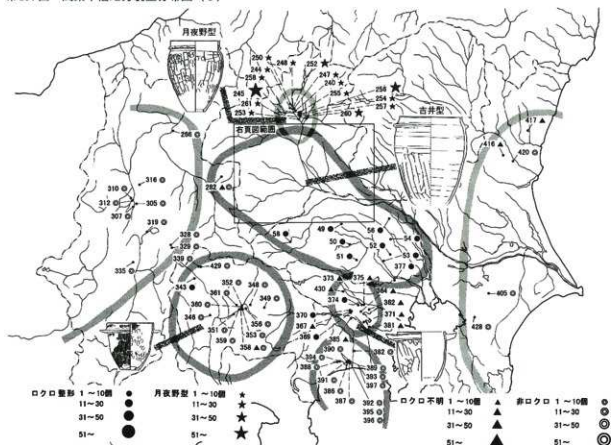
沼田下川田平井遺跡19号住居



高崎市下佐野遺跡I地区78号住居

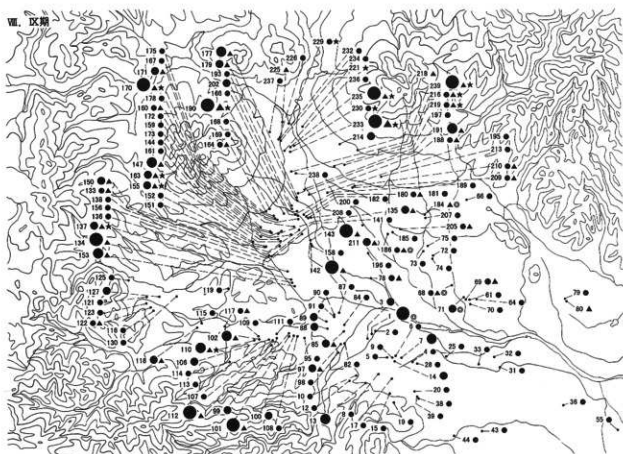


第897図 関東甲信地方羽釜分布図(3)



- | | | | | | |
|--------------|--------------|---------------|----------------|--------------|--------------|
| 1 中庭遺跡 | 70 小角田前遺跡 | 125 五科丙小竹遺跡 | 184 實經上川久保遺跡 | 247 大竹遺跡 | 369 多摩ニュータウン |
| 2 結安地白地遺跡 | 71 下野前遺跡 | 127 松平田工業団地遺跡 | 185 菅沼洗機遺跡 | 248 大友館址遺跡 | 304遺跡 |
| 3 田中前遺跡 | 72 下吉祥寺遺跡 | 130 菅沼・高井井遺跡 | 186 菅沼大宮遺跡 | 250 新田東遺跡 | 370 多摩ニュータウン |
| 4 古川崎遺跡 | 73 経沼東遺跡 | 133 兩妻遺跡 | 188 若宮遺跡 | 252 野田東遺跡 | 620遺跡 |
| 5 今井川越田 | 74 喜上原之城遺跡 | 134 下野前遺跡 | 189 上野前分寺 | 253 下川田平井遺跡 | 371 川島谷遺跡 |
| 6 山根遺跡 | 75 大榎木光山跡遺跡 | 135 黒野堂遺跡 | 190 上野前分寺尼寺 | 254 戸神塚跡Ⅱ遺跡 | 373 神明ノ北遺跡 |
| 7 大久保山遺跡 | 76 神人村Ⅱ遺跡 | 136 高崎城遺跡 | 中岡地城 | 255 戸神塚跡Ⅲ遺跡 | 374 南広地遺跡 |
| 8 阿知越遺跡 | 78 賀茂遺跡 | 137 舟橋遺跡 | 191 清星・陣場遺跡 | 256 戸神塚跡Ⅳ遺跡 | 375 落川遺跡 |
| 9 佐渡遺跡 | 80 小町田遺跡 | 138 菅大町村西遺跡 | 193 清星南部遺跡群 | 257 戸神塚跡Ⅴ遺跡 | 377 西原地区遺跡群 |
| 10 十二天遺跡 | 82 藤岡東部地区遺跡群 | 141 上皇親宮遺跡 | 195 野宮前遺跡 | 258 石宮遺跡 | 381 受地地ノ中遺跡 |
| 12 真鏡寺後遺跡 | 84 丹沖寺遺跡 | 142 新保遺跡 | 196 前田遺跡 | 260 赤井宮遺跡 | 382 海名木前遺跡 |
| 13 枇杷橋遺跡 | 85 株木田遺跡 | 143 新保田中村前遺跡 | 197 萩社・丘遺跡 | 261 中保遺跡 | 385 矢野・久保遺跡 |
| 14 雷電下遺跡 | 87 小野地区遺跡群 | 144 正観寺遺跡群 | 200 大友原殿Ⅱ遺跡 | 266 松原遺跡 | 386 福宮前A遺跡 |
| 15 砂神社前遺跡 | 88 上原遺跡 | 147 大八木屋敷 | 202 中島遺跡 | 282 川原田遺跡 | 387 厚木遺跡 |
| 17 菅下遺跡 | 88 上原遺寺前遺跡群 | 150 中尾遺跡 | 205 二之宮宮東遺跡 | 307 神戸遺跡 | 388 向原遺跡 |
| 19 広上原 | 90 森遺跡 | 151 天田・川沖遺跡 | 207 橋木遺跡 | 310 鳥立多良の遺構 | 389 高林寺遺跡 |
| 20 清水谷遺跡 | 91 上ノ下遺跡 | 152 上皇親宮遺跡 | 208 榑坂遺跡 | 312 新築遺跡 | 390 山王A遺跡 |
| 25 砂田前遺跡 | 95 白石塚岸遺跡 | 153 田端遺跡 | 209 芳賀東部団地遺跡 | 316 和田遺跡 | 391 山王B遺跡 |
| 28 喜寺遺跡 | 97 堀ノ内遺跡群 | 155 当良戸・原遺跡 | 210 芳賀北原遺跡 | 318 和田遺跡 | 392 四之宮下層遺跡 |
| 31 尾立遺跡 | 98 木崎山横遺跡 | 156 日高遺跡 | 211 野中天神 | 319 渡久遺跡 | 393 四之宮天中前遺跡 |
| 32 砂田遺跡 | 99 黒船遺跡群 | 158 經沢遺跡 | 213 天神風呂遺跡 | 328 阿久遺跡 | 394 上菅沢向井田遺跡 |
| 33 上取丸遺跡 | 100 黒船東崎遺跡 | 159 沢川天神久保遺跡 | 214 岩之下遺跡 | 329 大石遺跡 | 395 真土六の城遺跡 |
| 36 北島遺跡 | 101 萬原中西遺跡 | 160 舞台(Ⅱ)遺跡 | 218 窪谷戸遺跡 | 335 月見松遺跡 | 396 神久保遺跡 |
| 38 沼下遺跡 | 102 石ノ上土器遺跡 | 163 船越寺遺跡 | 219 小暮新築地 | 339 野助前田遺跡 | 397 野助前田遺跡 |
| 39 山中遺跡 | 106 谷塚村遺跡群 | 163 船越寺遺跡 | 220 芳賀新築地 | 343 宮間田遺跡 | 405 高野前群 |
| 43 白草遺跡 | 107 多比良遺跡 | 164 海行A・B遺跡 | 221 窪谷戸遺跡 | 346 木太遺跡 | 416 青木遺跡 |
| 44 谷崎地遺跡 | 108 多比良平野遺跡 | 166 園分遺跡群 | 225 坂之下遺跡 | 348 大切遺跡 | 417 瑞雲古墳群 |
| 49 新田坊遺跡 | 109 長根遺跡 | 167 三ツ寺Ⅱ遺跡 | 228 石原久保良田A遺跡 | 349 田野平遺跡 | 420 長春山遺跡 |
| 50 福有前遺跡(A区) | 110 長根羽田倉遺跡 | 168 小池遺跡 | 229 白井二位遺跡群 | 351 石橋赤黒洲遺跡 | 428 谷下遺跡 |
| 51 芥ノ越遺跡 | 111 樽谷戸遺跡 | 169 西之遺跡 | 230 八木原沖田Ⅱ遺跡 | 352 ノ宮町塚古泉屋 | 429 城下遺跡 |
| 52 赤川神社遺跡 | 112 赤川遺跡 | 170 天沼遺跡 | 232 半田新築遺跡 | 353 野木田遺跡 | 430 前田新地遺跡 |
| 53 林光寺遺跡 | 113 柳田遺跡 | 171 埴上遺跡 | 235 坂之内遺跡・矢倉遺跡 | 356 北大内遺跡 | |
| 54 大山遺跡 | 114 松久間遺跡 | 172 間道遺跡 | 234 有馬後田Ⅱ遺跡 | 358 総塚遺跡 | |
| 55 下地玉蓮遺跡 | 115 七日市観音前遺跡 | 173 南道遺跡群 | 235 有馬先遺跡 | 359 二ノ宮遺跡 | |
| 56 花崎遺跡 | 116 千足遺跡 | 175 保原田遺跡 | 236 有馬寺遺跡 | 360 風原遺跡 | |
| 58 藤原堂遺跡 | 117 田橋上平遺跡 | 177 北原遺跡 | 237 総塚遺跡 | 361 松本塚/越遺跡 | |
| 61 下田中川久保遺跡 | 118 野尻丹波光寺遺跡 | 178 堀越遺跡 | 238 眞野遺跡 | 362 窪谷遺跡 | |
| 64 台長山遺跡 | 119 尾ノ入遺跡 | 179 天沼遺跡 | 239 八木原遺跡 | 364 多摩ニュータウン | |
| 66 清水山遺跡 | 121 古立久保遺跡 | 180 黒野谷Ⅱ・Ⅲ遺跡 | 240 後田遺跡 | 533・534遺跡 | |
| 68 下瀬名塚遺跡 | 122 八木遺賢祠遺跡 | 181 熊野谷遺跡 | 244 前田原遺跡 | 367 多摩ニュータウン | |
| 69 三ツ木遺跡 | 123 八木遺賢祠遺跡 | 182 元沢前田神社遺跡 | 245 村主遺跡 | 182遺跡 | |

第898図 羽釜分布拡大図(3)



量も少なく、吉井型羽釜と混在しているところに特徴がある。

11世紀前半(第899・900図)

中堀遺跡が終焉した後の状況についても若干ふれておこう。

関東甲信地方では、信濃で急激に羽釜の出土が増加する。煮炊具の主体とはではないが、出土量は多い。

そのほかの地域では、減少化傾向にある。これはこの時期の遺跡の調査例が少ないことも原因であるが、関東甲信地方の羽釜は、このまま減少していくと思われ、中世の羽釜に直接結びついていくものではないと思われる。

月夜野型・吉井型羽釜とも、この減少化傾向は同じである。特に、月夜野型羽釜は減少化が顕著で、この段階以降は、生産されなくなると思われる。

吉井型羽釜の分布範囲もやや狭くなり、ほぼ上野南部の平野部に限定される。東毛地域では、東毛型と吉井型が混在する傾向は、前段階と同じである。

北武蔵では、それまで吉井型羽釜が分布していた地域でも、在地色の強い酸化焙焼成の羽釜に変わる。しかし、これらの羽釜は出土量が非常に少なく、単発的な生産であったと思われる。

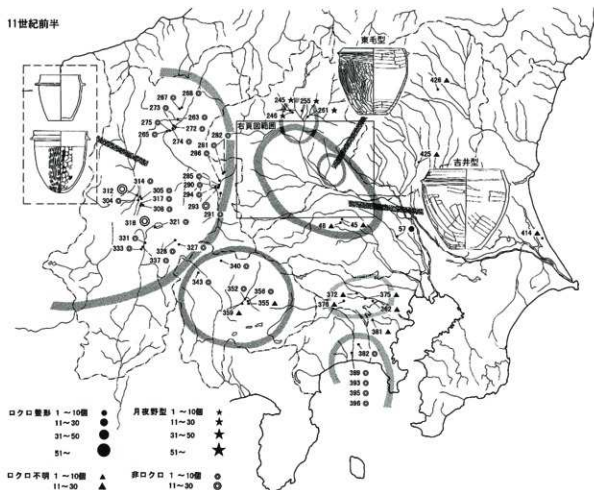
また、この時期から、吉井型羽釜の分布とはほぼ重なるように、土釜といわれる煮炊具が登場する(第887・888図参照)。

土釜は、11世紀以降急速に普及するが、羽釜も使用され続け、羽釜は煮炊具の主体から追い落とすまでには至らない(第890図)。

以上述べてきたように、10世紀初頭に出現する吉井型羽釜は、在地の社会が大きく変化する過程で急速に普及していく。

第899図 関東甲信地方羽釜分布図(4)

11世紀前半

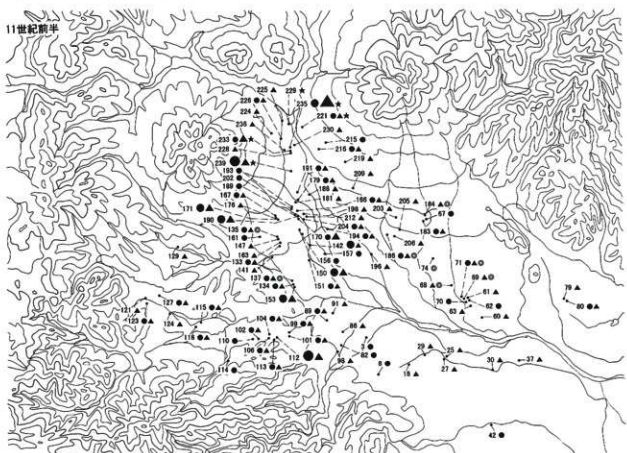


ロクロ製形 1~10個 ● 月夜野型 1~10個 ★
 11~30 ○ 11~30 ★
 31~50 ○ 31~50 ★
 51~ ○ 51~ ★

ロクロ不明 1~10個 ▲ 形ロクロ 1~10個 ○
 11~30 ▲ 11~30 ○
 31~50 ▲ 31~50 ○
 51~ ▲ 51~ ○

- | | | | | |
|--------------|--------------|---------------|---------------|--------------|
| 3 田中前遺跡 | 102 神保富士塚遺跡 | 171 堀上遺跡 | 229 白井二位屋遺跡 | 317 吉田内井遺跡 |
| 8 阿知越遺跡 | 104 折茂東遺跡 | 176 保渡田東遺跡 | 230 八大原沖田宮遺跡 | 318 吉田川西遺跡 |
| 18 向田遺跡 | 106 多胡蛇島遺跡 | 179 下東西遺跡 | 233 有馬遺跡 | 321 新井北遺跡 |
| 25 砂田前遺跡 | 110 長根羽田倉遺跡 | 181 鹿野谷遺跡 | 235 有馬桑屋遺跡 | 322 判の木山東遺跡 |
| 27 中宿遺跡 | 112 矢田遺跡 | 183 寛延五反田遺跡 | 236 有馬桑寺遺跡 | 328 阿久遺跡 |
| 29 大久保遺跡 | 113 柳田遺跡 | 184 寛延上川久保遺跡 | 239 大久保A遺跡 | 331 沢入口遺跡 |
| 30 宮ヶ戸 | 114 佐久間遺跡 | 186 寛延天之宮遺跡 | 245 村主遺跡 | 333 雲地遺跡 |
| 37 道ヶ谷戸遺跡 | 115 七日市稲荷前遺跡 | 188 菅宮遺跡 | 246 大塚遺跡 | 337 中宿遺跡 |
| 42 鹿島平方墓 | 118 南蛇井根光寺遺跡 | 189 上野園分寺 | 255 尹神田訪川遺跡 | 340 塩川遺跡 |
| 45 西原遺跡 | 121 古立東山遺跡 | 190 上野園分寺尼寺 | 261 中宿遺跡 | 343 宮前田遺跡 |
| 48 蟹沢遺跡 | 123 八木堀沢沢遺跡 | 中間地域 | 263 芥田小学校遺跡 | 352 一ノ宮町埋没糸屋 |
| 57 さくら遺跡 | 124 妙義東部遺跡群 | 191 清皇・陣場遺跡 | 265 藤ノ井遺跡群 | 355 東新居遺跡 |
| 60 常木遺跡 | 127 松井田工重田遺跡 | 193 清皇南部遺跡群 | 267 高川西条遺跡 | 356 北大内遺跡 |
| 61 下田中川久保遺跡 | 129 下受地十二遺跡 | 194 三川遺跡 | 268 湯川藤沢地遺跡群 | 二ノ宮遺跡 |
| 62 下田中宿遺跡 | 133 兩堂遺跡 | 196 菅田遺跡 | 272 田中沖遺跡 | 362 聖宮遺跡 |
| 63 小角田1遺跡 | 134 下佐野遺跡 | 198 車作遺跡 | 273 田牧居得遺跡 | 372 東町遺跡 |
| 67 今井柳田遺跡 | 135 熊野堂遺跡 | 202 中島遺跡 | 274 南宮遺跡 | 375 薄川遺跡 |
| 68 下藤名塚遺跡 | 137 舟橋遺跡 | 203 堤家遺跡 | 275 富士宮遺跡 | 378 高松遺跡 |
| 69 ツツ木遺跡 | 141 上笠塚南遺跡 | 204 天神遺跡 | 281 下荒田遺跡 | 381 受地いやま遺跡 |
| 70 小角田東遺跡 | 143 新保遺跡 | 205 二之宮東遺跡 | 282 川原田遺跡 | 382 海老名本郷遺跡 |
| 71 西寺前遺跡 | 147 大八木遺跡 | 206 之宮千足遺跡 | 285 上久保田遺跡 | 389 高村寺遺跡 |
| 74 書上原之城遺跡 | 150 中尾遺跡 | 209 秀賀東田園地遺跡 | 286 上智徳遺跡 | 393 四之宮天神前遺跡 |
| 79 芳茂遺跡 | 151 天田川沖遺跡 | 212 柳久保遺跡群 | 290 菅根新城遺跡 | 395 六ノ城遺跡 |
| 80 小町田遺跡 | 153 日塔遺跡 | 215 暖目日遺跡 | 291 中屋敷遺跡 | 396 神久保遺跡 |
| 82 群馬南部地区遺跡群 | 156 高直遺跡 | 216 窪谷戸遺跡 | 293 北山寺遺跡 | 414 片岡田遺跡 |
| 86 株木遺跡 | 157 萩原田遺跡 | 219 長泉寺遺跡 | 294 北西の久保遺跡 | 425 下野園分寺遺跡 |
| 89 上原寺前遺跡群 | 161 北新成遺跡 | 221 窪谷戸遺跡 | 304 菅賀くまのかわ遺跡 | 426 後岡遺跡 |
| 91 中1遺跡 | 163 難通寺遺跡 | 224 窪谷戸遺跡 | 305 小原遺跡 | |
| 98 本郷山根遺跡 | 166 園分橋遺跡 | 225 坂之下遺跡 | 308 赤木遺跡群 | |
| 99 鳳凰遺跡群 | 167 ツツ寺II遺跡 | 226 石原久保良道A遺跡 | 312 南栗遺跡 | |
| 101 黒原中西遺跡 | 170 鳥羽遺跡 | 228 大久保日遺跡 | 314 平田本郷遺跡 | |

第900図 羽釜分布拡大図(4)



吉井型羽釜は、出現当初から、微妙に異なる様々な形態を示すが、同時期の供膳具のように在地色が強く、地域ごとに大きく異なるというものではなく、地域差というものが抽出できない。

その出土量は莫大で、今回集計した群馬県内の羽釜の総数は3,758個体のにぼる。

ちなみに武蔵産産の中心であった、埼玉県内での土師器甕A・Bの総数は4,117個体であり、群馬県の羽釜出土量は、これに比敵するものである。

個体数は報告書に掲載されたものだけであり、両者を単純に比較するわけにはいかない。しかし吉井型・月夜野型羽釜の存続期間が、10世紀初頭～11世紀前半の約150年間であるのに対して、土師器甕A・Bの存続期間が、7世紀末～10世紀前半までの300年であることを考えると、吉井型羽釜を中心とする上野の羽釜生産が、いかに短期間に大量に生産されていたかが分

かる。

ちなみに群馬県では、7世紀末～10世紀前半の土師器甕A・Bの総数は5,632個体である。これと比較しても羽釜の生産量が多いといえるであろう。

吉井型羽釜は、その名前の通り、群馬県南西部の鍋川流域を中心に生産されていたと思われ、また土師器甕A・Bはその分布密度から、武蔵北部から上野南部にかけてが生産拠点であったと推定される。

このように両者は非常に近接した地域で生産されていたにもかかわらず、吉井型羽釜が上野南部から武蔵北部の児玉・賀美郡という比較的狭い範囲に分布するのに対して、土師器甕A・Bは関東地方西半分から信濃にまでおよぶ広大な分布域を示している。

現象面だけをみれば、土師器甕A・Bが消滅している、羽釜がそれにとって代わるように思えるが、分布範囲の違いと、先に述べた出土量の比較からは、吉井

型羽釜と土師器甕A・Bでは、生産から流通までが根本的に異なっていた可能性が指摘できよう。

この両者の違いは、当時の社会変化と無関係であるはずはなく、羽釜が広く流通し始める10世紀前葉という時期を考える上で重要な鍵を握るものである。

まとめ

9世紀から10世紀にかけての煮炊具について、分布と出土量から、生産と流通の基礎的事実の確認を試みた。そこで、最後に今後課題として本論により明らかになった問題点を抽出しておきたい。

①土師器甕A・B（武蔵型甕）の系譜問題

中堀遺跡では、該当する時期の遺物が検出されなかったことから触れることができなかった。

従来この問題は『武蔵型』という名称により一括されて看過されてきた傾向があるが、北武蔵・上野と南武蔵では認識に差があるようである。8世紀の須恵器や土師器供膳具の生産・流通とも密接に関連するだけに、きちんとした議論がなされるべきであろう。

②土師器甕B出現の問題

中堀遺跡でB型としたいいわゆる「コの字口縁」の甕については、技術的には土師器甕の消費拡大にともなう土師器甕Aの手抜きにより発生したと考えた（第V章-1-(1)土器の変遷参照）。

土師器甕Bが、すでに広範囲の流通圏を確立していた土師器甕Aの分布域に同時期に発生したことは、9世紀代の武蔵型甕の生産体制を考える手がかりとなると思われる。

本論ではの在地有力者（郡司クラス）のネットワークの存在を安易に想定したが、このネットワークの実

態について検討を重ねていく必要がある。

③9世紀末～10世紀前半の煮炊具生産と流通

中堀VI期以降土師器甕A・Bは生産量が減少し、分布範囲も北武蔵・上野に狭まる。これに対応するように、いままで武蔵型甕が煮炊具の主体であった地域で新たな煮炊具の出現がみられるようになる。その最たるものが上野の羽釜である。

武蔵では大宮台地を中心に、下総の影響下に成立した、ロクロ整形の酸化焙焼成の煮炊具が出現するが、この時期の煮炊具の様相は今ひとつ明らかになっていない。

この時期の土器生産は『小地域化』という言葉でよく言い表されるが、広大な分布範囲をみせる上野の羽釜はこの言葉には当てはまらない。煮炊具にみられる地域差について具体的に明らかにする必要がある。

④羽釜の生産体制について

吉井型羽釜の生産量は多量である。しかも土師器甕に比べてその存続期間は短く、短期大量生産である。

製作技法も土師器甕とはまったく異なり、須恵器技術であるロクロを使用する。

この地域で煮炊具に須恵器の技術が使用されたのは羽釜が始めてであり、土師器甕とはまったく異なり、新たな生産体制が出現したといえる。

この新たな生産体制がどのようなものであったのか不明な点が多く今後の課題であろう。

以上4点を問題点として上げた。古代における煮炊具の検証は、ともすれば供膳具の付け足し的なところが多い。今後はここであげた4つの問題だけでなく幅広く議論が重ねられていくことが必要であろう。

(5) 船載陶磁器

中堀遺跡からは、8点の船載陶磁器が出土した。第901図にその集成図をあげておく。

1は、白磁の碗である。口縁部は、玉縁であり、緩やかに内湾しつち立ち上がる。濁りのない白色の釉が全体を覆っている。

2は、同じく白磁の碗である。口縁部は玉縁であり、緩やかに内湾しつち立ち上がっている。濁りのない白色の釉が全体を覆っている。器壁は、大変薄く2mmほどである。

3は、白磁の碗である。口縁部は玉縁であり、直線的に立ち上がり、口唇部で外反する。濁りのない透明感のある白色の釉が、全体を覆っている。2と同様に器壁は大変薄い。

4は、おそらく白磁碗の体部の破片であろう。一部に釉薬の剥がれた跡がみられる。やはり透明感のある白色である。

5は、白磁碗の底部破片である。高台は蛇の目高台で、へら状工具による凹凸が残っている。乳白色の釉が全面にかけられる。土橋分類(土橋1993)の碗IA1類、山本分類(山本1988・89)のI類にあたる。

6は、同じく白磁碗の底部である。高台は蛇の目高台で、へら状工具による凹凸はみられず、平滑に仕上げられている。全面に透明感のある白色の釉がかけられている。土橋分類の碗IA1類、山本分類のI類にあたる。

7は、細青磁盒である。合子の蓋で口縁部の隅部が、各部で突出し、六角形となる。内面(見込み)には釉が掛からず、六ヶ所の目を確認することができる。目

は紅色に変色している。外觀は、淡い青緑色で表面の釉が、やや粗てざらついている。国内出土の合子の例は少なく、福岡県海の中道遺跡・大宰府跡・鴻臚館跡・柏原M遺跡・観世音寺・大阪府瓜破遺跡・平安京跡などで出土しているに過ぎない。

8は、青磁碗の体部の破片である。青白色の小さな破片である(第1分冊口絵参照)。

なお、船載陶磁器については、山本信夫氏に実見していただき、ご教示を賜った。荆州または定窯系白磁で、大宰府編年のI類であろうとのことである。

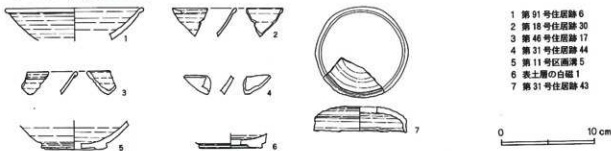
出土遺構は、竪穴住居跡が主だが、ほとんど覆土上層からの出土である。竪穴式住居跡の住人が、直接この船載陶磁器を使用していたとは、出土状況からはいえない。

むしろ出土の中心が、後述する第2区画に集中していたことから、この区画に関係した、すなわち中堀遺跡の経営主体者に最も近い人物が、貿易陶磁器の使用者とすることができよう。またこの区画には、緑釉陶器も集中して出土しており、緑釉陶器の担い手が、船載陶磁器の担い手であったともいえる。

ところで中堀遺跡を取り巻く、周辺諸国のどのような遺跡から船載陶磁器は、出土しているのだろうか。第902図は、周辺諸国から船載陶磁器の出土した遺跡の分布図である。遠江国の城山遺跡や下総国の向台遺跡は、8世紀の資料のため除くとして、9世紀以降、相模国から武蔵・上野・信濃国にかけて、船載陶磁器の分布が集中する。

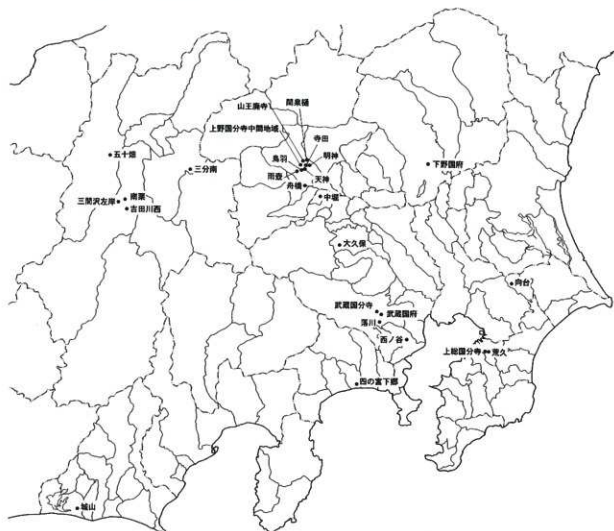
ことに武蔵国府・上野国府・下野国府などの国府や

第901図 船載陶磁器集成



- 1 第 91 号住居跡 6
- 2 第 18 号住居跡 30
- 3 第 46 号住居跡 17
- 4 第 31 号住居跡 44
- 5 第 11 号区画溝 5
- 6 表土層の白磁 1
- 7 第 31 号住居跡 43

第902図 武蔵国周辺の船載陶磁器出土遺跡



国分寺、近くに国府を抱える平塚市四ノ宮下郷・日野市落川・塩尻市吉田川西遺跡などでは、破片資料だけでなく、完形に復元可能な資料までも出土している。

群馬県では、上野国分寺中間地域・鳥羽・天神・元総社明神・寺田・閑泉樋・山王廃寺などの上野国府内や国分寺の近隣、官衙や寺院が集中する、上野国の政治的文化的中枢地域から豊富に出土している（大西1989）。

上野国分寺中間地域遺跡は、まさしく国分寺の僧寺と尼寺に挟まれた地帯で、国分寺の造営や維持にかかる人々の集落といわれる。同様に千葉県の上総国分寺や荒久遺跡などの例も、国分寺の経営にかかる遺跡から貿易陶磁器が出土する遺跡と位置付けられよう。

一方、金属生産が盛んに行われた鳥羽遺跡は、上野国府（国府在庁）の管掌した器材の生産や修復、建物の築造などにかかる遺跡とすれば、修理所や木工所のおかれた可能性がある。

また寺田遺跡や元総社明神遺跡は、人形の出土などから国府内を流れる牛池川を、祓所とした遺跡であろう。さらに山王廃寺は、白鳳期から続く寺院で、平安時代には、定額寺となっている。

この他、群馬県では、東山道の道筋に位置し、『上野国交替実録帳』の「八木院」に比定される大八木屋敷遺跡に近い雨壺遺跡や、鳥川に隣接した『万葉集』の「佐野の舟橋」に近い舟橋遺跡（川津）は、ともに交通路に隣接した遺跡で、物資の集中する場に占拠し

た遺跡である。

東京都の落川遺跡も同様である。対岸に武蔵国府を臨む落川遺跡は、多摩川の舟運や背後に中山間部を控え、7世紀代以来、東国の流通センターとして経済的な基盤を確固とし、10世紀以降、在庁官人を含め、武士化していく姿が見られる遺跡である。

その一方、推定信濃国府の南方の沖積地に展開した長野県南栗遺跡や吉田川西遺跡、あるいは三間沢川左岸遺跡などは、東山道という交通路よりも、9世紀以降、初期荘園として展開した遺跡である。ことに三間沢川左岸遺跡では、銅印「良相私印」、下神遺跡では、墨書土器「草茂」の出土から藤原良相の庄園、「草茂庄」の比定地にされており、このような初期荘園を媒体として、貿易陶磁器が拡散したことも考えられる。おそらく大町市五十畑遺跡も同様であろう。

このような国府や国分寺、あるいは初期荘園、流通の結節点にかかる遺跡で、初期貿易陶磁器が出土する傾向がみられた。これらの遺跡には、国司や国師、あるいは王親御使など、都城との往還を頻繁に行っていた者の存在が推定でき、貿易陶磁器の運搬者のイメージをつかむことができる。ところが、埼玉県東秩父村の久大保遺跡だけは、このような者達だけでは理解できない。

久大保遺跡は、山間部に営まれた砂鉄採集の鍛冶生産を行っていた遺跡とされ、その第1号竪穴式住居跡から白磁皿の小片が出土している。白磁皿は、外面の上半と内面のみに釉がみられ、下半は露胎である。釉

調は、白色で、口縁部は、外反し、見込みに沈線をもつ。山本分類のⅠ類、土橋分類のⅡ類である。大宰府編年からⅡ類は、10世紀末から11世紀初頭に輸入されたとされている。

1号竪穴式住居跡は、10世紀前半と報告されるが、11世紀に下がる可能性のある土釜も、他の住居跡から出土している。発掘成果によって、久大保遺跡は、山間の鉄資源開拓のために、9世紀末から入植したようである。

このような鉄にかかわらず、金銀資源の発見は、いわゆる「山師」といわれる特殊技能を持った集団によって、維持されていたらしいことは、これまでの研究で明らかだが、どのような経緯で彼らが、貿易陶磁器を入手したのであろうか。その背景に頻繁な都鄙往反と、都市貴族の支援を予測することができよう。

近年、長野県では、10世紀後半から11世紀にかけて、山間の久大保遺跡のような遺跡で、白磁Ⅰ類の碗・皿(破片)が出土した遺跡の竪穴式住居跡から、フィゴの羽口や鍛冶滓などが、供伴する例が増加しつつある。またこれらの遺跡は、1~2軒程度で構成される小規模集落の場合が高い。

このような中で中堀遺跡は、前に挙げた長野県の初期荘園の例に最も近く、前司国司や王親御使など、都城との往還を頻繁に行っていた者の存在が推定でき、貿易陶磁器の出土は、中堀遺跡の富裕さを表現するに、十分な資料であるといえよう。

(6) 金付着灰釉陶器

金の付着した灰釉陶器について、概要・出土事例・意義などについて記すこととする。

中堀遺跡の当該資料は、第35号住居跡と第84号住居跡の覆土中から出土した破片である。第35号住居跡の破片は、遺物水洗作業中に発見し、第84号住居跡の破片は、接合作業中に金が付着していたことを確認し、両者を接合したところ、同一個体と分かった。

第35号住居跡は、中堀Ⅴ期に第84号住居跡は、中堀Ⅶ期にそれぞれ位置づけられた住居跡である。前者は9世紀Ⅳ四半期、後者は10世紀Ⅲ四半期とした。

この灰釉陶器は、大形の椀でロクロ成形の後に、体部下半を底部付近まで削り込んでいる。高台は、外に踏ん張る角高台に近い形態で、磨いたように平滑化している。この平滑な高台部下端は、あるいは使用中の摩耗によるのであろうか。底部は、厚く作られる。施釉は内面のみ刷毛塗りによって施こされている。中心部に一筆と、体部に2段に分けて塗られていたようである。胎土は、白色の均質な土を使用しており、猿投古窯跡群の黒笹Ⅷ窯式、古段階の灰釉陶器であろう。

金の付着状況は、底部内面から3分の1に、金粉を散りばめたように付着している。底部が密で、上部に向かって薄くなる。表面は、たいへん滑らかで、つるつるしている。金の付着した部分は、釉薬が、かせている。おそらく金の付着時に摩耗したためと考えられ

る。

ところでここで金とした物質は、当初は、金泥と考えたが、蛍光X線分析法によって分析を行った結果、「金箔」という結論を得た(附編「金付着灰釉陶器分析」参照)。結論からいうと、銀を微量含んだ純金に近い物質で、金箔(金粉)である。なお金泥は、蛍光X線分析法によると、混ざりもの(膠等)が抽出され、それによって光沢も鈍くなるという。

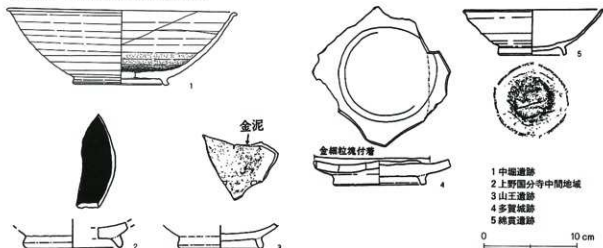
さて、この金箔の付着した灰釉陶器は、どのように位置付けられるのであろうか。

その前に金箔の製造工程について、若干記しておきたい。

金箔は、現在その生産量の90パーセントが、北陸の金沢で生産され、漆工芸品を彩る素材として利用されているという。ただし金沢の生産は、伝統的ないわゆる箔打ちによって行われているのではなく、機械打ちによるらしい。

伝統的な製法を今に伝える滋賀県甲賀郡甲西町の下田金箔について、木村至宏氏の報告によると、金箔製作で最も重要なのは、箔を挟み込む紙を作ることという(木村1985)。この箔打ち用紙は、灰汁を浸み込ませた紙で、ズミ(金箔にする原材料の上澄み)を挟み込み、椀で10ミクロン以下まで敲打して金箔とする。その後所定の大きさに切り、「ぬきごと」という作業

第903図 主な遺跡の金付着灰釉陶器



- 1 中堀遺跡
- 2 上野国分寺中間地域
- 3 山王遺跡
- 4 多賀城跡
- 5 純實遺跡

第904図 金付着灰釉陶器出土遺跡分布図



を行い、「広物帳」という帳面に移し替え仕上げる。

このようにしてできた金箔は、所定の大きさに切り揃えられ、真四角の箔となる。切り屑は、金粉として利用される。金粉の製造工程は、この金箔から行う方法と、金地金からヤスリなどで削りだして行う方法とがある。後者は、田口勇氏によると、現在では、会津

若松市で見られる程度という(田口1996)。

さて中堀遺跡の金付着灰釉陶器の事例であるが、この付着物が金箔か、金粉かについて私見を述べておきたい。まず付着状況であるが、底部内面から体部内面の下部に集中してみられること。粒子に僅かながら走方向性があること。そして金粒子が、灰釉陶器の器表の凹凸に挟み込まれた状態であること。等から金箔が、器内面の器表の全体を覆う、いわゆる金彩土器ではなく、金粉をさらに細かく精製するための器と考えた。

さてこのような金付着土器の類似例であるが、第903図に主な類似例、第904図に出土遺跡の分布図をあげておいた。北から各事例について説明を加えておくこととする。

後田遺跡 山形県酒田市の後田遺跡は、出羽国府である城輪柵跡に近い平安時代の遺跡であり、緑釉陶器や灰釉陶器をはじめとして、越州窯系青磁の香炉蓋・陶硯などが出土した。後田遺跡は、国司の館か、国府内の主要官衙と考えられる。

後田遺跡から出土した金付着土器は、「金粉のつく須恵器」と報告されるが、実見の結果、甘い焼き上がりの灰釉陶器であった。高台付碗の底部小破片である。底部内面に付着する。

多賀城跡 宮城県多賀城市の多賀城跡六月坂雑司群から出土している。著名な多賀城跡は、陸奥国府・鎮守府を抱えた遺跡である。この多賀城の雑司の営まれた六月坂地区で出土した。

1点のみ報告されている。「金細粒塊」付着灰釉陶器とされる。高台付皿の底部破片で、内面に偏って金の付着が確認できる。黒笹90号窯式の古段塔の製品と考えられる。中堀遺跡同様、「内面の大部分は、施釉部分もすり減って」と観察されている。

また政庁北西の丸山地区の大形建物群の表土層からも出土している。

山王遺跡 多賀城跡の西に広がる山王遺跡は、国守の館や国府雑任の住宅が並ぶ陸奥国府である。このなかで報告されているのは、「右大臣殿 饒馬叔文」の題箋を出土した国守館から1点と、未報告例（東戸浦地区）1点がある。

全て破片であるが、両者とも底部付近に付着した状況が伺える。1点は、べっとりと厚く付着していた。黒笹90号窯式の新段階の高台付碗と考えられる。

上野国分寺中間地域 上野国の国分僧寺・尼寺の中間地域は、文字通り、国分寺の造営や維持のために営まれた遺跡で、灰釉陶器や緑釉陶器が大量に出土した。H区157号住居跡から出土した。

高台付碗である。底部付近の破片で、全体に付着している。高台付皿の可能性もある。高台が低く、折戸53号窯式の製品であろう。

綿貫遺跡 群馬県高崎市の綿貫遺跡は、中堀遺跡とはやや異なるが、遺跡内に区画溝が巡り、瓦葺き基壇建物の構築された遺跡である。やはり9世紀から10世紀にかけて集落が営まれている。S I 0001（竪穴式住居跡）出土。

3分の2程度が、残存する高台付碗である。金は、底部内面に付着。報告では、「アマルガムの状態で土器内にあったものが器面に残った」とされるが疑わしい。折戸53号窯式の製品であろう。

信濃国府推定地 この事例は、長野県松本市の信濃国府推定地の一角で採集された土器片である。その後発掘調査等が行われておらず、遺跡の性格は不明のままである。

底部内面に金が付着した小破片で、黒笹90号窯式かと思われる。現在は、松本城内の日本文化博物館に「金彩土器」として保管されている。関沢聡氏御教示。

武蔵国府 東京都の府中市で調査された武蔵国府関連遺跡で、金の付着した灰釉陶器の高台付碗が出土した。底部内面に付着するが、未報告である。

以上は、灰釉陶器の高台付碗か高台付皿の例であるが、次に挙げる例は、金の付着した小瓶と石杵である。

上総国分寺周辺遺跡 千葉県原市の上総国分寺にかかる荒久遺跡で、内面に金の付着した緑釉陶器の小瓶が出土した。外面は、火を受け変色している。金を融解した埴場と言われる。

御所遺跡 山梨県大月市の御所遺跡は、山間部に展開した小規模な平安時代の集落跡である。石杵の頭部に金粉が、包み込むように付着していた。金粒を細粒化する際に使用された石杵とされる。

以上の例から中堀遺跡の金付着灰釉陶器は、金を細粒化し、金粉を作成した道具として使用されたと解釈したい。そして出来上がった金粉が、別の容器で膠水とともに溶かれ、金泥として絵画や紺地金泥経などに使われたと推測しておきたい。

なお多賀城跡の政庁跡から出土した風字硯（破片）の硯面には、金泥のついた筆の穂先を直した痕跡が、0.5mmほど見られる。金泥は、このような硯で台成され、使われていたのであろう。

また金の付着した灰釉陶器は、国府や国分寺、あるいは有力な寺院などの事例から、僧侶に限らず、絵画や紺地金泥経などと、直接かかる人物によって使われていた。漆紙文書とともにこの遺物は、中堀遺跡の主人公の社会的地位や教養の高さを反映しているよう。

(7) 灰釉陶器

中堀遺跡出土の灰釉陶器について

中堀遺跡から出土した灰釉陶器は、図化した遺物だけでも830点に上る。この数値は、埼玉県下最大だけでなく、これまでの県内の総出土量670点(1996年調べ)を超えるほどであった。発掘調査時は、東濃の製品が目立つという印象があったが、復元・図化などの整理を行うにつれ大半は、猿投窯跡群の製品であろうと思われた。

その後、整理上で尾野善裕・小森俊博・平尾政幸・三好美穂・立和名明美氏等から猿投の製品と考えていた製品ほとんどが、実は、三河から静岡県西部にかけての製品であるとご教示を受けた。

そこで生産地である三河から静岡県西部にかけての諸窯跡群の遺物を実見し、生産地の資料と中堀遺跡の遺物を比較し、さらに調査を担当されている方々にご教示を受けた。また浜北市宮口窯跡群を調査された久野正博氏には、中堀遺跡の灰釉陶器の大半を実見していただいた。

実見の結果やご教示の内容を踏まえ、中堀遺跡の整理担当者である田中と末木が、灰釉陶器について大まかな生産地・底部調整方法・施釉方法の分類を行った。また終始、当事業団の宮藤由紀子に助言を得た。

ところで産地ごとに、手法の変化の様相が異なると予測されるため、まず大まかな生産地の推定から行った。その基準は、以下の通りであり、一覧表の生産地の項目と同一である。

【二川】 愛知県豊橋市二川窯跡群で生産された製品に類似する一群をまとめた。二川窯跡群は、調査を担当された費元洋氏によると、現在までに約60基を確認し、そのうち数基を調査したが、全て未報告であるという。三河・遠江国の窯業が、湖西窯跡群(古墳時代)→二川窯跡群(古代)→源美窯跡群(中世)へと、須恵器→灰釉陶器→中世陶器を立地を変えながら移動し生産を続けたという。灰釉陶器は、黒笹14窯式から操業されるが、黒笹90窯式に急激に増加し、以後継続したという。

猿投窯跡群との技術的な連携がみられ、碗・皿はもとより、多彩な瓶類・仏具も生産するなど、あらゆる器種を生産していたようである。黒笹14・90窯式に近いほど胎土はきめ細かく、猿投の製品に近いが、やや粗い。しかし窯体内の温度が上がらないと、胎土が、少し粉っぽくなり黒色の粒子を含む。この粒子は、古天竜川が形成した粘土層中に存在し、浜北市の宮口窯跡群の製品にも含まれるという。また釉薬の発色は、黄みの強い淡い緑色が多いが、色調に相当ばらつきがある。とくに猿投の製品と比較すると、釉薬の発色がやや悪く、相対的に猿投の製品と見分けが付きにくい。

分類の結果、積極的・二川窯跡の製品といえる灰釉陶器は少なかったが、白色に近い胎土で、猿投や宮口窯跡の特色を含まない一群を一括し、広義で捉えておくこととした。

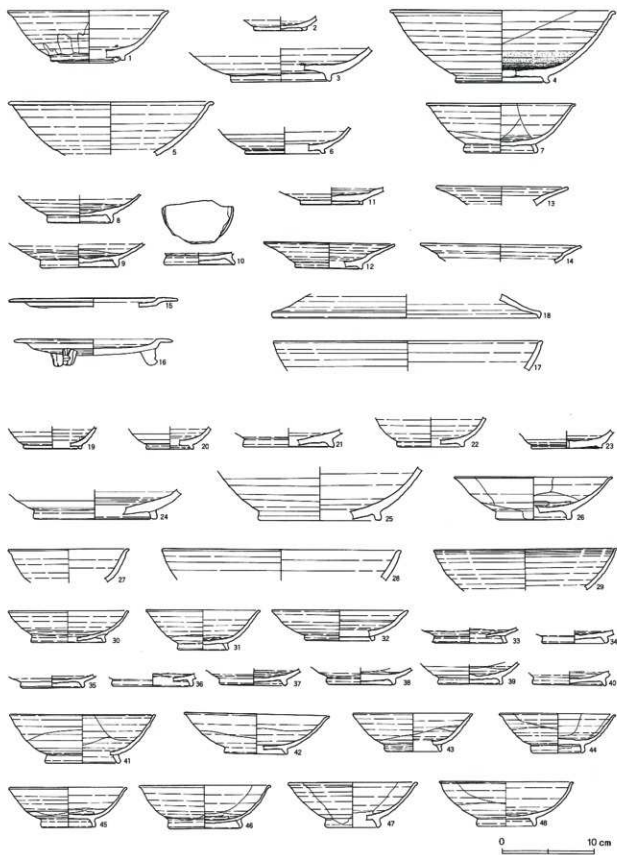
【宮口】 静岡県浜北市宮口窯跡群で生産された製品に類似する一群をまとめた。二川窯跡群は、調査を担当された久野正博氏によると、現在までに約30基が確認され、そのうち5基が発掘調査されている。さらに未知窯が、多数存在する可能性が高いという。

宮口窯跡の製品の特徴は、高台の作りと底部の器壁に生じた発泡であるという。この発泡は、透明から黒色のセルロース承接剤(セメダイン)状の吹き出しである。久野氏の話では、粘土の成分によって発泡するという。高台の特色としては、いわゆる三日月高台の下半部が強くナデられて仕上げている。二川窯跡の製品と比較すると、やや胎土が粗く、粉っぽい一群である。釉薬は、緑が比較的濃く発色していた。

なお窯跡内から出土した灰釉陶器を実見したが、焼成温度が適温となっておらず、釉薬が発色しないなど発色も悪く、器本体も黄味がかかっていた。

【清ヶ谷】 静岡県小笠郡大須賀町清ヶ谷窯跡群で生産された製品に類似する一群をまとめた。清ヶ谷窯跡群は、30から50基あまりの窯が存在すると推定され、

第905图 灰釉陶器集成(1)



一部が、静岡大学によって調査されている。黒埴90窯式から東山72窯式、そして山茶碗まで生産されていた。器種構成は、碗皿を中心として、瓶類もわずかに焼成された。

実見を行った結果、色調は、黒ずんだ黄灰色であり、漬けがけ・刷毛塗りが混用され、釉薬の発色は、旗指窯跡群よりも黄緑色に近かった。器内の厚さが個体によって一定せず、また高台の形態や体部の形態も一定していなかった。

磐田市の遠江国の国府や国分寺などでは、清ヶ谷窯跡の窯の製品と推定される、比較的良質な製品が出土し、その周辺の集落遺跡では、比較的粗雑な灰釉陶器も出土しているという（松井1989）。

また鳥田市旗指窯跡群では、約60基が確認され、一部が調査されている。調査を担当された渋谷昌彦氏によると、猿投窯跡群の折戸53窯式から百代寺窯式、そして山茶碗にかけて生産されていたという。器種構成は、碗皿類を中心として、瓶類や仏器などさまざまな製品が焼成されていた。

胎土の特徴としては、二川や宮口窯跡群に比べて粗く、砂質でくすんでいた。また施釉は、漬けがけだけではなく、かなり新しい段階まで刷毛塗りが残る。

分類の結果、中堀遺跡では、積極的に旗指窯跡の製品といえる製品はなく、旗指窯跡群の未知窯も含め東遠江地域の製品を「清ヶ谷」と、広義で捉えておくこととした。

〔猿投〕 愛知県名古屋市・三好町に広がる猿投窯跡群の製品に類似する一群をまとめた。中堀遺跡の猿投窯跡群産の灰釉陶器については、尾野善裕氏にご教示を得た。

中堀遺跡から出土した猿投窯跡群産の灰釉陶器の特色として、胎土は、白色に近く、夾雑物が少ない。また精選された胎土で、きめが細かく、釉薬の発色も薄い黄緑色に近い。

二川窯跡群の製品と類似するが、良質な胎土やシャープな作りなどの点で、猿投窯跡群の製品が勝る。

なお猿投窯跡群の製品の実見にあたっては、安田幸市氏にご教示を得た。

〔東濃〕 岐阜県多治見市内の灰釉陶器窯跡群の製品に類似する一群をまとめた。

東濃の製品は、胎土が白色から灰色まで存在するが、大変きめが細かい。割れ口は塩化ビニールの割れ口のような鈍い輝きである。施釉は、刷毛塗りがけまで確認できる。釉薬の発色は、乳白色や淡い緑白色等である。

東濃の製品については、山内伸祐氏にご教示を得た。

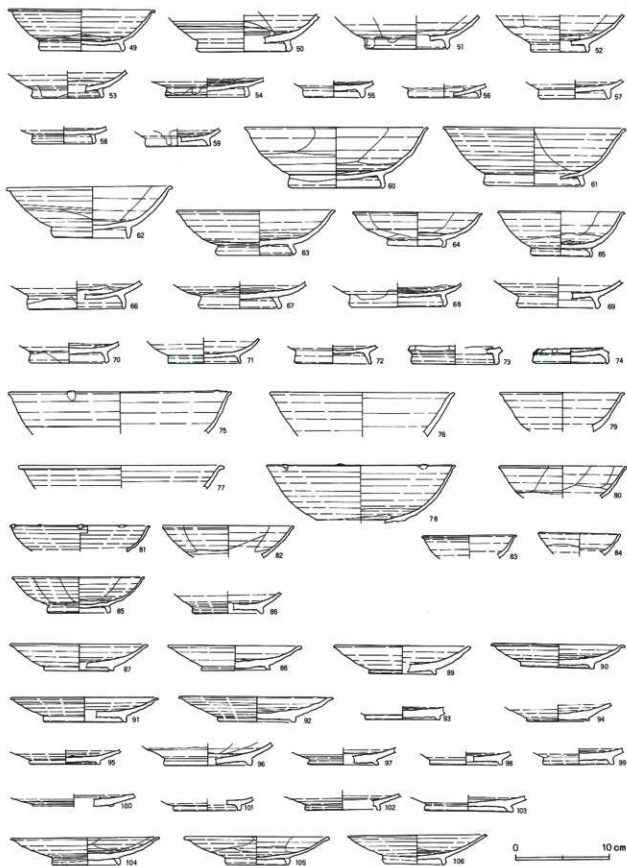
このほか生産地の資料として、愛知県小牧市尾北窯跡群や岐阜県美濃須賀窯跡群・関市内の窯跡群の資料について、当該市町村や各担当の方のご厚意で実見を行ったが、中堀遺跡から出土した灰釉陶器には、確実にこれらの窯跡群からの製品といえる遺物はなかった。

次に中堀遺跡から出土した灰釉陶器について、産地ごとに概括して述べることにしたい。なお中堀遺跡出土の灰釉陶器について、第905図から第922図にかけて集成図を掲載した。1から668までが、供膳具（高台付碗・高台付皿・段皿・耳皿）とし、677から830は、貯蔵具・仏器その他（長頸壺・手付瓶・甕など）の順に掲載した。

猿投 猿投窯跡群で生産された製品といえそうな製品は、わずかに23点しか出土しなかった。1～18・669・670・785・815・819である。

1から10は、高台付碗である。1・3には、三叉トチンがあり、1の底部、高台内側には、シッタの口縁部が融着し残存している。1から3・5・6・10は、内面の全面に刷毛塗りの施釉を確認でき、外面に施釉はみられない。4・8は、内面口縁部と見込み部に刷毛塗りがされるが、外面には施釉がみられない。7・9は、口縁部の内外面に刷毛塗りがみられ、見込み部にも刷毛塗りを確認できる。

第906图 灰釉陶器集成(2)



1から10までの底部は、全てヘラキリ調整されている。高台の形状は、1から3が角高台であり、直立しつ立ち上がる。4・6は、高台端部が外方に突出するやや高い角高台である。5は、高台の形状は把握できないが、口縁部の形状が4と類似することから同様と考えた。7から10は、三日月高台で、7は底部との接地幅が狭いが、8から10は広く長い三角形に近い。

4の内面には、金の細粒が付着しており、金泥を製作した際の道具と推定される(第V章1-(5)参照)。

11から14は、段皿である。施釉は刷毛塗り、底部はヘラキリである。11には三叉トチンがみられ、内面のみ全面に施釉されている。13には高台がみられないが、12・13と同様の角高台と推定したい。

15・16は、三足盤である。16は無釉で底部には、丁寧なヘラキリ調整がみられる。内面は、視面のように大変丁寧に磨かれている。足部は、丁寧に面取りされ、端部で獣足状となっている。15は底部以下を欠損しているが、14と同様な三足盤と考えた。内面に刷毛塗りによる施釉がみられる。

17は、大形の碗と考えられる。内外面に刷毛塗りされている。口縁部のみである。

18は、蓋である。天井部に施釉が確認される。

669は、長頸壺である。頸部から肩部にかけて施釉薬が流れている。器表は、赤黒色で大変硬質に焼き上げられている。670は、頸部以上は欠失しているが、浄瓶であろう。胴部中に2条の沈線がみられる。

785は、大形の手付瓶である。外面に施釉され、把手は、丁寧に面取りされている。815・819は、把手である。

二川 二川窯跡群で生産された可能性のある製品は、19から165、671から688、780から783、786から801、813・814の174点である。

(高台付碗) 19から86は、高台付碗である。24・25は、大形の高台付碗であり、19から23は、小形の高台付碗である。19には、三叉トチンがあり、内面全面に施釉がみられる。19から84は、刷毛塗りによる施釉

がみられる。また底部の残るものは全てヘラキリである。

30から40の高台は、低く、底部との接地面が狭く、外端が突出する。外端部と内端部にナデやヘラで面を作っていることを特徴としている。とくに32は、口縁部内面に沈線のある器高の低い椀である。

41から59は、短い三日月高台である。底部との接地面はやや幅広く、高台端部で内側に小さく屈曲する。

60から73は、高い高台である。三日月高台と直立する高台(62・72から74)で、三日月高台は、内側に力強く屈曲し、後者は、2から3段高台を積み重ねたような高台である。大形の高台付碗(60から62、66から69・73・74)は、大形の高台付碗。他はやや小振りの碗である。

75から84は、口縁部の破片である。78・81には、口唇部に輪花がみられる。75から78は、大形の高台付碗、79から82は、中型の高台付碗、83・84は、小形の高台付碗である。

85・86の施釉は、つけがけである。底部の調整は、85がヘラキリ、86は、高台付碗で唯一の糸切りである。86の高台は低く、三角形である。

(高台付皿) 87から132は、高台付皿である。高台付碗同様の分類を行った。87から124は、施釉は刷毛塗り、底部調整はヘラキリである。88から90・95には、三叉トチンがみられる。

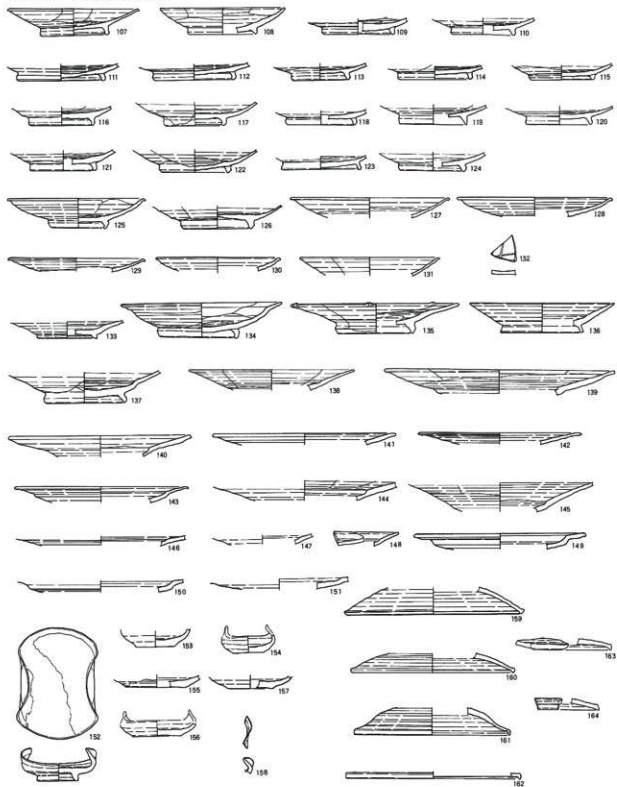
87から103は、角高台である。ことに87から91・93・95から98は、内端部がやや浮き、底部と高台の接地面の幅が広い高台である。他は、外方への突出が目立つ形態の角高台である。

104から105は、三日月または三角高台である。低い高台で、内側に大きく内湾するのを特徴とする。

125・126は、施釉は刷毛塗り、糸切りの底部調整を施した高台付皿である。高台は三日月高台で、底部との接地面は幅広い。

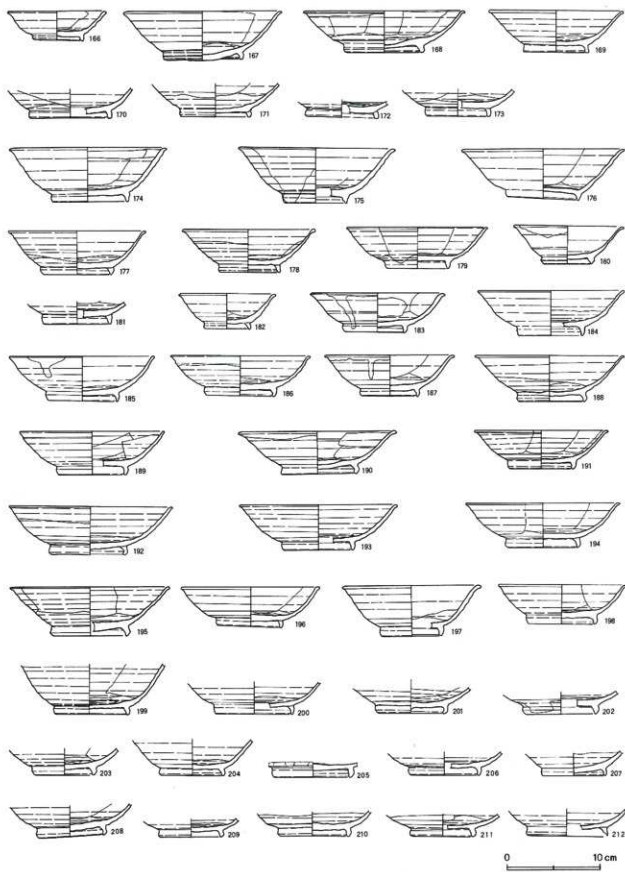
127から132までは、口縁部のみの資料で、全て刷毛塗りである。132の内面には、施釉以前に刻書「十」が書かれている。

第907图 灰釉陶器集成(3)

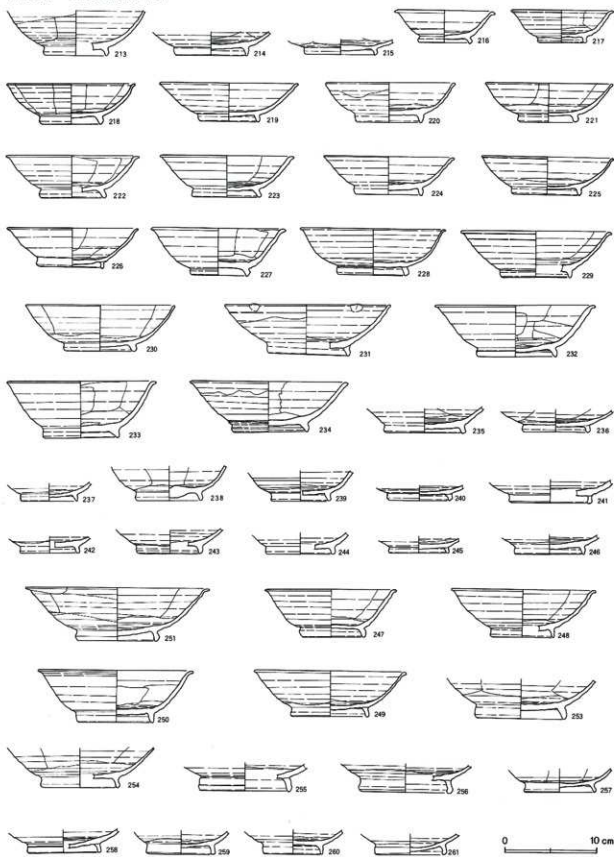


0 10 cm

第908图 灰釉陶器集成(4)



第909图 灰釉陶器集成(5)



(段皿) 133から148は、段皿である。施釉は刷毛塗り、底部調整はヘラキリである。133は、角高台である。134は、三日月高台である。135や137は、高台と底部の接地面の幅が広い。135は、細長い高台である。輪花がみられる。138から148は、口縁部のみの段皿である。149から151は、三足盤が段皿である。

152から158は、耳皿である。152は、高台が付く。内面と耳部に施釉がみられる。底部調整はヘラキリである。153から157は、高台が付かない。153・154はつけがけによる施釉で、底部調整は糸切りである。155から157は、刷毛塗りによる施釉で、底部調整は、糸切りである。

159から165は、蓋である。161が唯一、肩部に張りのある形態で、他は緩く内湾する。外面に刷毛塗りが施釉される。

671から688は、長頸壺である。頸部に刷毛塗りによる施釉がみられる。最大径が、胴部の上半にある器形である。682は、肩部が鋭角に折れる長頸壺である。679は、胴部上半に付けられた把手である。

780から783は、短頸壺である。外面に釉がみられる。全て口縁部から胴部にかけての資料で、底部資料はみられない。784は、頸部の短い壺か甕である。口唇部が、ヘラで面取りされている。

786から801は、頸部が小さくまとまる瓶である。外面に施釉がみられる。786から796は大形、他は小形である。

813と814は、同一個体の可能性があるが、把手付平瓶である。816から818・820は、瓶類の把手である。823・824の器形は明らかにできなかった。おそらく瓶類の底部であろう。

宮口 宮口窯跡群で生産された可能性のある製品は、166から396、689から712、794・802から805、821・822・828・829の266点である。

(高台付椀) 166から285は、高台付椀である。166から270は、刷毛塗りが無釉の灰釉陶器である。また底部調整はヘラキリである。

166から173は、角高台だが、外へ一端張った後に、踏ん張るような形態である。166が小形の他は、法量にそれほど差はない。二川の角高台よりも125を除きやや高い。

174から181は、角高台よりも高台端部が小さく、接地面が傾斜し、面を持つ形態である。底部は均質であり太くならない。180のみ小振りである。

182から215は、三日月高台である。高台と底部との接地部の幅が厚く、高台端部で急速に屈折する。182だけが小形で、他はとくに法量差が大きくない。

216から246は、上記以外の短い高台で、全体にシャープさが無く、端部が丸く仕上げられている。三日月から三角がかった高台である。216・217は小形で、他は中から大であるが、その境は判然としない。

247から269は、高く細長い高台である。全体に直立し、端部で内湾している。251から256は、大形の高台付椀で、他は中型の高台付椀である。

270は、小形の椀で、高台は三角高台である。

271は、刷毛塗りによる施釉で、底部調整は糸切りである。高台は、接地幅の広い三角形の高台である。272・273は、つけがけによる施釉で、底部調整は糸切りである。高台は低い高台である。

274から285は、口縁部のみの資料で、277には輪花がみられる。内外面とも刷毛塗りによる施釉がみられる。

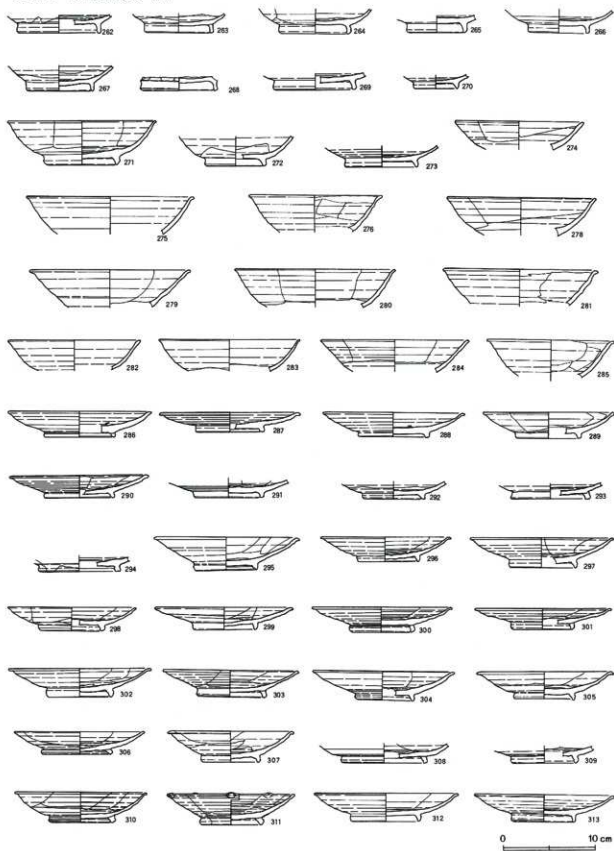
286から366は、高台付皿である。286から355は、刷毛塗りによる施釉が無釉で、底部調整はヘラキリである。286・288には、三叉トチンがあり、内面全面に施釉がみられる。

286から294は、角高台である。ただし293・294は、断面がM字状であり、やや異なる。また286や288・289は、底部に行くに従って器肉が厚くなる傾向にある。

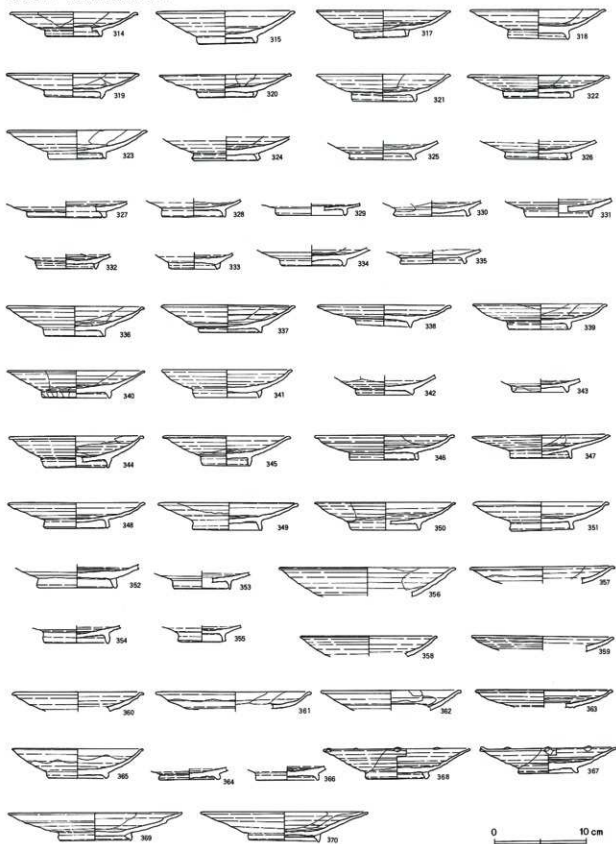
295から309は、角高台よりも高台端部が小さく、接地面が傾斜し面を持つ形態である。概して底部と高台の接地面の幅は狭い。

310から335は、低い三角形の高台で、様々であるが、内湾した三日月形となる。法量差がほとんどない。

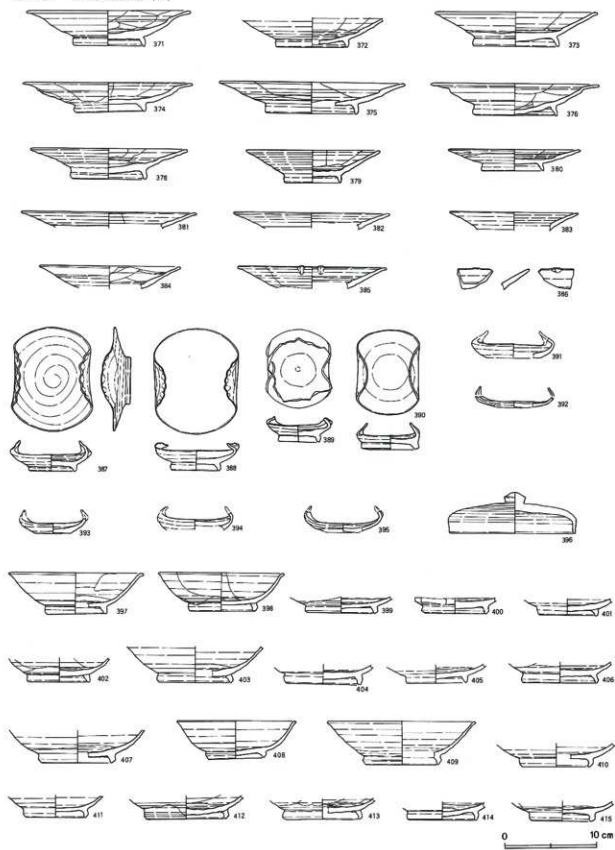
第910图 灰釉陶器集成(6)



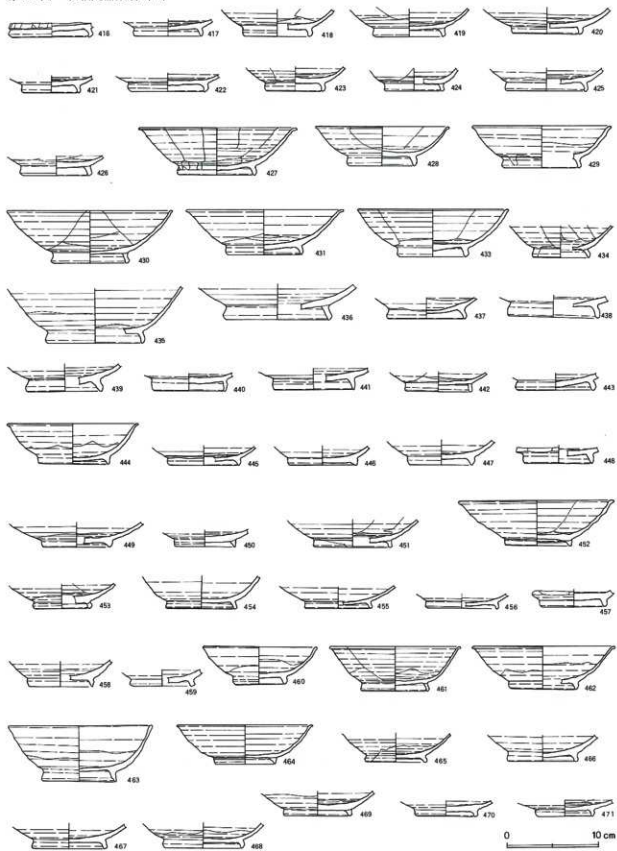
第911图 灰釉陶器集成(7)



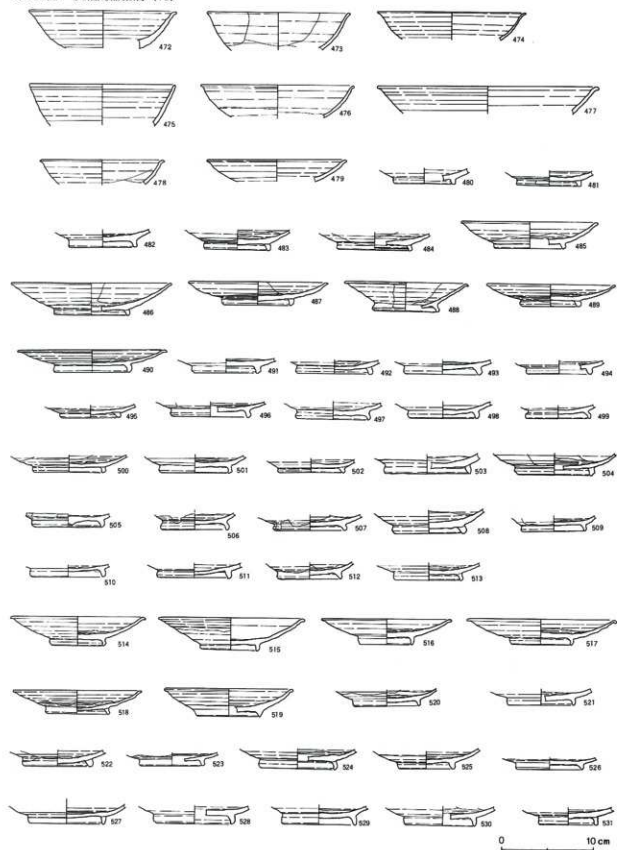
第912图 灰釉陶器集成(8)



第913图 灰釉陶器集成(9)



第914图 灰釉陶器集成 (10)



336から343は、高台の内面が緩いカーブを描く三角形の高台である。外面は垂直に立ち上がる。

344から355は、高い高台の一群である。高い高台は比較的垂直に立つものが多く、端部は丸く仕上げられている。

356から363は、口縁部のみの資料である。全て刷毛塗りによって施釉されているか、無釉である。

364は、刷毛塗りによって施釉され、底部調整は糸切りである。高台は広がった角高台である。

365・366は、つけがけによって施釉され、底部調整は糸切りである。高台は三角形である。

(段皿) 367から386は、段皿である。367・368・385・386には、口唇部に輪花がある。367から380は刷毛塗りによって施釉され、底部はヘラキリである。381から386も刷毛塗りであり、底部調整もおそらくヘラキリであろう。

367から372の高台は低く、とくに367はやや崩れた角高台である。368から372は、高台内面の接地面が傾斜し面を持つ形態である。

373から380は、高い三日月の高台である。途中でやや屈折するのを特徴とする。

(耳皿) 387から395は耳皿である。387から390は高台付耳皿で、他はつかない。高台の付く耳皿は、刷毛塗りで施釉され、底部調整はヘラキリである。高台は低い三日月高台である。387・388の耳は、ヒダ状に作られている。389・390は、単純に作られた耳である。

391から395は、高台の付かない耳皿である。刷毛塗りによって施釉され、底部は糸切りのままである。耳は単純に内側へ折れただけである。

396は、蓋である。見込み部まで高く直立していることから短頸壺の蓋と考えられる。外面に丁寧に施釉され、淡い緑色に仕上げられた優品である。

689から712は、長頸壺である。頸部の内外面と肩部に施釉される。肩の張りの高い卵形の胴部で、頸部は細い。694・697は、把手が付く。

794は、大形の瓶である。802から804は、小形の瓶である。とくに803は、手付瓶である。805は、小形の

長頸壺の口縁部である。瓶は外面のみ施釉がみられる。821・822は、手付瓶の把手である。

825は、長大な高台(脚部)の付く大形の器形で、内面にも施釉される。香炉火舎か。

826は、リング状の上部が付くようで、器形は不詳である。

清ヶ谷 清ヶ谷窯跡群で生産された可能性のある製品は、397から551、713から756、795・806・807・827から830の204点である。

(高台付椀) 397から479は、高台付椀である。397から459は、刷毛塗りか無釉の灰釉陶器である。また底部調整はヘラキリである。397から407の高台は、低く、高台内面にえぐり込み状の面を持つことを特徴としている。高台と底部の接地面の幅は狭い。

408から426の高台は、低い三日月状で、内側に強く屈曲し端面は鋭い。法量的なげらつきは少ない。

427から433の高台は、長く外に張り出した三日月状である。法量的に435・441のような大形とそれ以外に分かれる。

444から450は、高台と底部の接地面の幅が、広く高台端部の鋭い三角形の高台である。高台の高さは低い。

451から459は、その他の形態の高台である。451・452は、角高台に近いが退化している。

460から463は、つけがけによる施釉で、底部調整はヘラキリである。高台は三角形が高い。

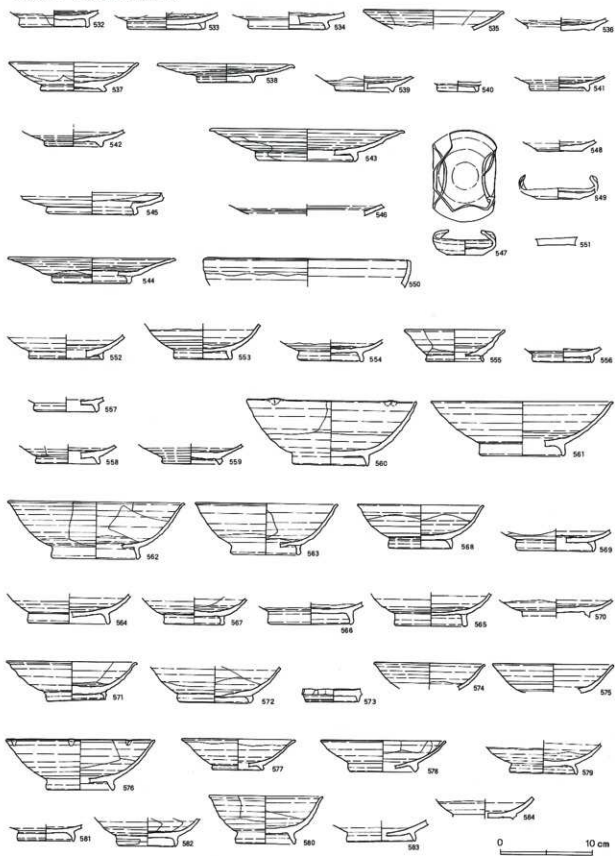
464から471は、つけがけによる施釉で、底部調整は糸切りである。高台は概して低く、とくに高台内面は緩くカーブしている。

475から479は、口縁部のみの資料である。

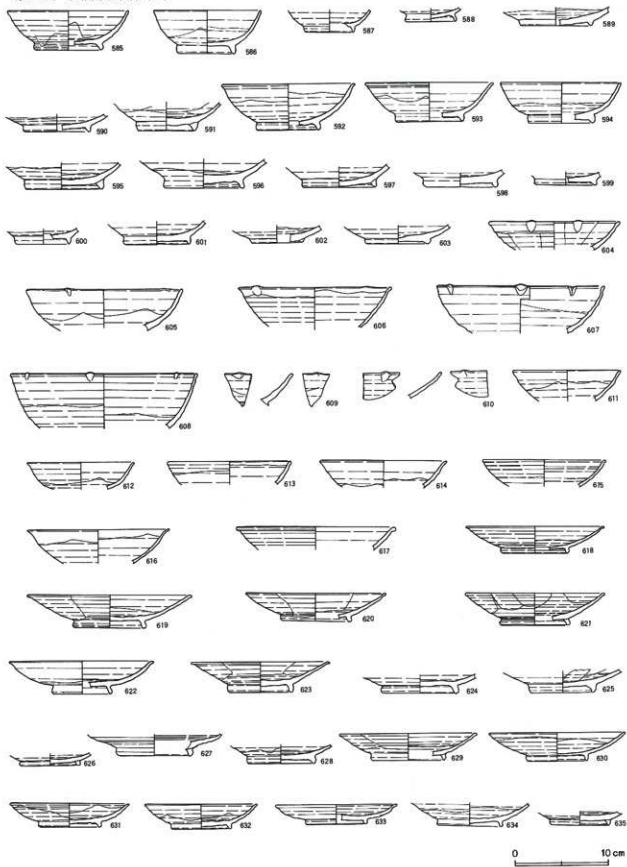
480から542は、高台付皿である。480から536は、刷毛塗りか無釉の灰釉陶器である。また底部調整は、ヘラキリである。480から485の高台は、角高台であるが、だいぶ退化している。

486から513の高台は、低い爪形の高台である。高台がやや厚めである。

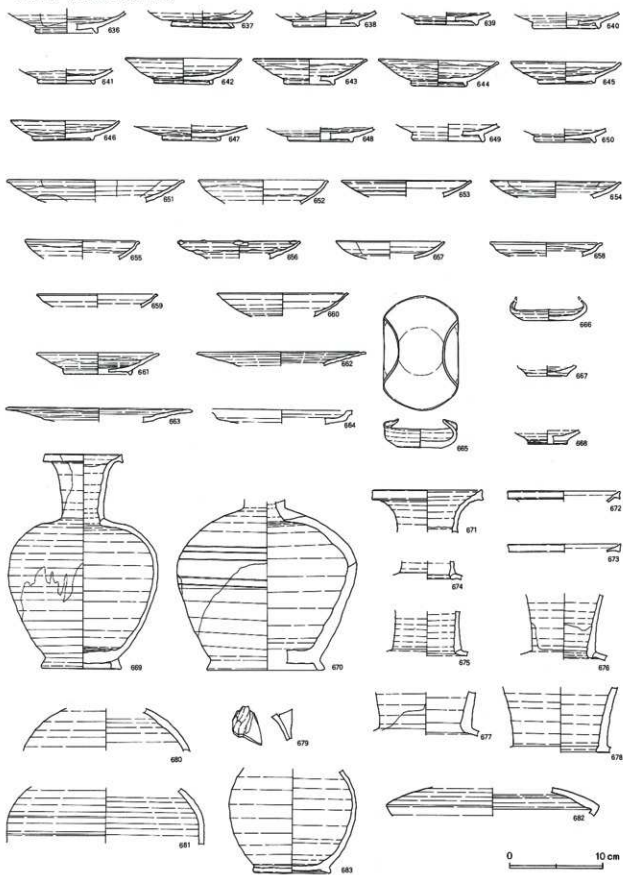
第915图 灰釉陶器集成 (11)



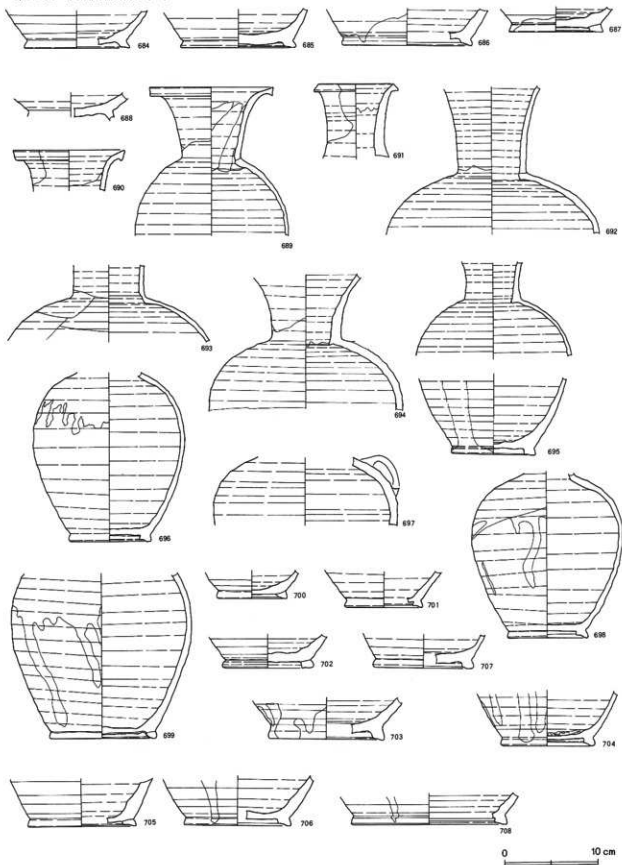
第916图 灰釉陶器集成 (12)



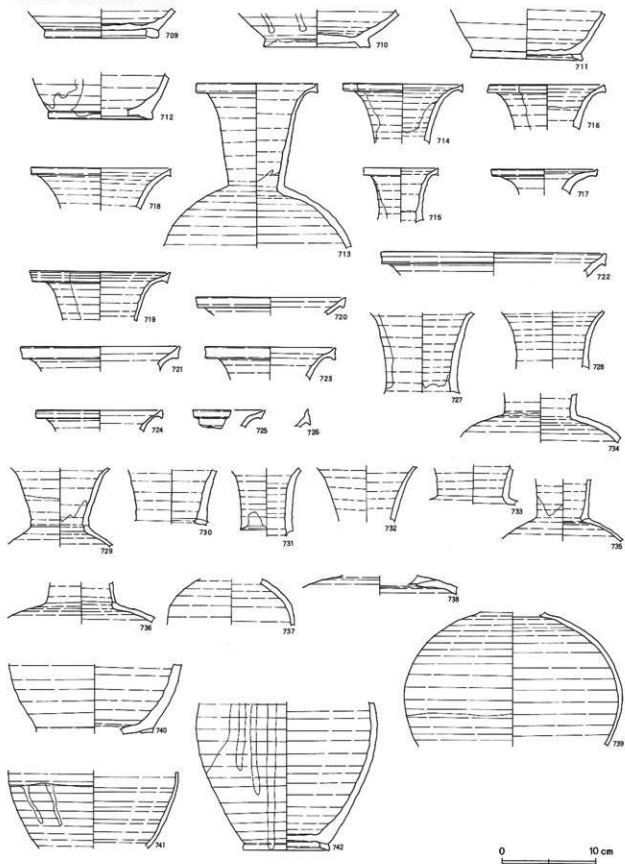
第917图 灰釉陶器集成 (13)



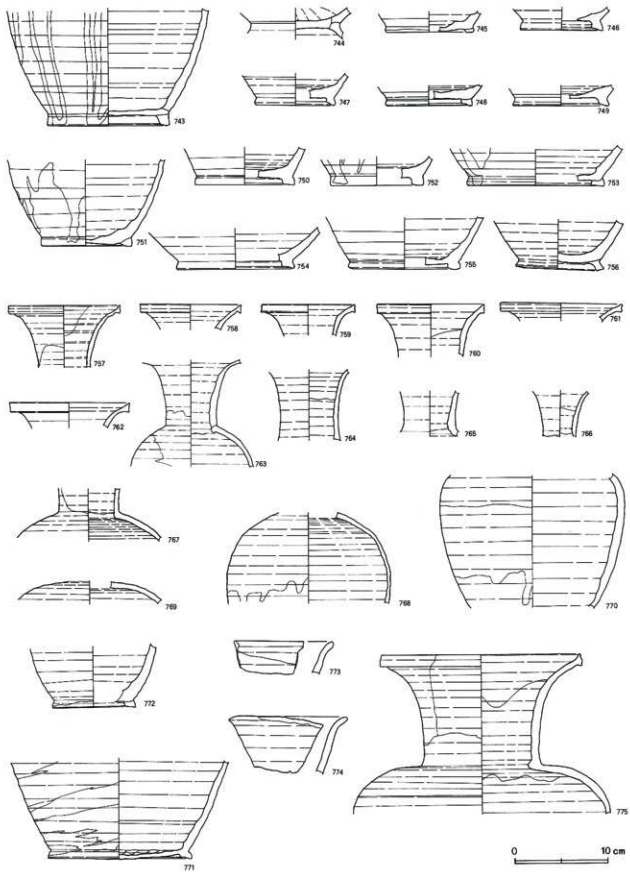
第918图 灰釉陶器集成 (14)



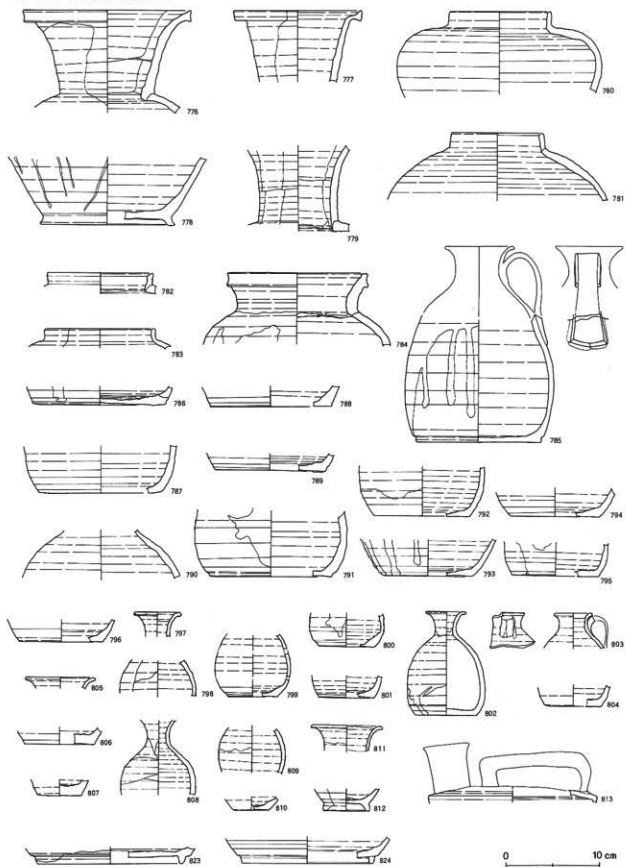
第919图 灰釉陶器集成 (15)



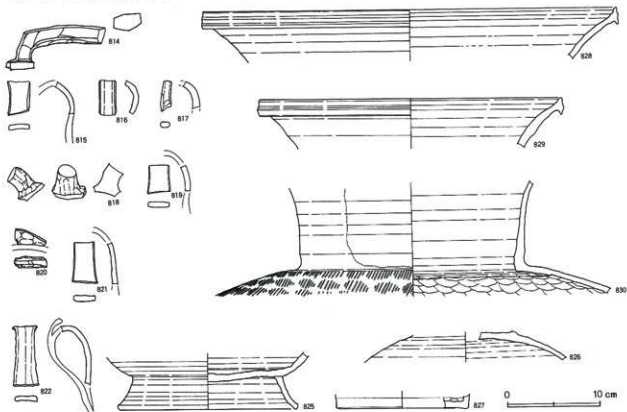
第920图 灰釉陶器集成 (16)



第921图 灰釉陶器集成 (17)



第922図 灰釉陶器集成 (18)



第664表 灰釉陶器一覽 (1)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整	
1	S J	35	48	高台付碗	狭	投	ハケヌリ	ヘラ切り
2	S J	158	8	高台付碗	狭	投	ハケヌリ	ヘラ切り
3	S J	50	1	高台付碗	狭	投	ハケヌリ	ヘラ切り
4	S J	36	37	高台付碗	狭	投	ハケヌリ	ヘラ切り
5	区画溝	1	4	高台付碗	狭	投	ハケヌリ	ヘラ切り
6	区画溝	10	9	高台付碗	狭	投	ハケヌリ	ヘラ切り
7	S J	172	10	高台付碗	狭	投	ハケヌリ	ヘラ切り
8	S B	4	291	高台付碗	狭	投	ハケヌリ	ヘラ切り
9	O-53	表土	23	段	皿	投	ハケヌリ	ヘラ切り
10	S K	163	3	高台付碗	転用	投	ハケヌリ	ヘラ切り
11	K-14	K-16	9	段	皿	投	ハケヌリ	ヘラ切り
12	S B	55	13	段	皿	投	ハケヌリ	ヘラ切り
13	S B	55	14	段	皿	投	ハケヌリ	底部不詳
14	S K	552	1	段	皿	投	ハケヌリ	底部不詳
15	S B	55	16	段	皿	投	ハケヌリ	底部不詳
16	S B	54	80	三足	盤	投	無釉	底部不切
17	S B	55	26	高台付大碗	狭	投	ハケヌリ	底部不詳
18	K-90	P-21	62	高台付蓋	狭	投	ハケヌリ	底部不詳
19	区画溝	12	59	高台付碗	狭	投	ハケヌリ	底部不切
20	S J	22	5	高台付碗	二	用	ハケヌリ	ヘラ切り
21	S K	第3土壌群 Q	14	高台付碗	二	用	ハケヌリ	ヘラ切り
22	S J	186	6	高台付碗	二	用	ハケヌリ	ヘラ切り

第 665 表 灰釉陶器一覽 (2)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
23	K-14	G-6-4	3	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
24	S J	223	79	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
25	S J	194	11	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
26	S J	229	18	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
27	S J	188	10	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
28	S J	188	14	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
29	S J	186	5	高台付輪	二川	ハケヌリ	底部 詳
30	S J	48	51	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
31	S J	161	34	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
32	S J	55	6	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
33	S J	162	31	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
34	S E	SE-3	3	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
35	S J	243	5	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
36	S J	32	14	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
37	S K	671	1	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
38	S J	53	70	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
39	S B	4	300	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
40	O-53	I-9-3	17	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
41	S J	240	9	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
42	S J	135	15	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
43	S J	161	35	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
44	土器集中区	Q-16.17	14	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
45	S J	249	17	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
46	S J	161	36	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
47	S D	20	2	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
48	S J	45	12	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
49	K-90	J-15-1	5	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
50	区画溝	12	63	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
51	区画溝	7	7	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
52	S J	32	13	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
53	S J	162	28	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
54	S J	150	14	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
55	区画溝	28	1	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
56	S J	161	41	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
57	O-53	J-15-4	11	高台付皿	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
58	O-53	L-15-2	28	段	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
59	O-53	J-15-1	7	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
60	S J	217	65	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
61	S J	223	80	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
62	S J	197	60	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
63	S J	163	3	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
64	S J	45	13	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
65	S J	23	20	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
66	S J	37	45	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
67	K-90	J-11-1	14	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
68	K-90	J-15-2	13	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
69	S K	688	2	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
70	S J	246	5	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
71	S J	36	40	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
72	大 壺	714	4	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
73	S J	26	9	高台付輪	二川	ハケヌリ	ヘラ切り

第 666 表 灰釉陶器一覽 (3)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
74	区南溝	12	74	高台付碗(転用碗)	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
75	K-90	表土	3	輪花付高台付碗	二	川ハケヌリ	底部不詳
76	S J	198	18	高台付碗	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
77	K-90	G-10-3	4	高台付碗	二	川ハケヌリ	底部不詳
78	K-90	J-15-2	1	輪花付高台付碗	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
79	S J	38	20	高台付碗	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
80	S J	65	7	高台付碗	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
81	S J	220	52	輪花付高台付碗	二	川ハケヌリ	底部不詳
82	区南溝	7	6	高台付碗	二	川ハケヌリ	底部不詳
83	O-53	J-15-1	2	高台付碗	二	川ハケヌリ	底部不詳
84	S J	171	2	高台付碗	二	川ハケヌリ	底部不詳
85	S J	220	51	高台付碗	二	川ツケガケ	ヘラ切り
86	O-53	表土	15	高台付皿	二	川ツケガケ	ヘラ切り
87	S B	55	6	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
88	S B	54	48	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
89	S J	127	11	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
90	S B	54	47	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
91	K-14	R-23	5	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
92	K-14	C-4-3	8	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
93	K-14	F-4-2	2	高台付碗	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
94	K-14	R-20-2	6	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
95	K-14	S-18-4	4	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
96	S X	4	5	高台付碗	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
97	区南溝	28	2	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
98	S B	55	12	段高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
99	K-14	表土	7	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
100	S J	223	83	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
101	S J	109	17	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
102	S K	第3土壌群 C	2	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
103	S J	225	5	高台付碗	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
104	S J	214	19	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
105	S J	151	9	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
106	S X	3	5	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
107	S B	48	1	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
108	O-53	J-7	12	高台付碗	二	川ツケガケ	ヘラ切り
109	S J	48	55	高台付碗	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
110	K-90	E-8-1	45	高台付碗 <small>か</small>	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
111	区南溝	12	70	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
112	区南溝	12	67	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
113	S J	36	45	高台付碗	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
114	S J	202	44	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
115	S J	48	54	高台付碗	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
116	S B	4	294	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
117	S J	162	30	高台付碗	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
118	S J	166	1	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
119	S J	197	68	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
120	S K	第2土壌群	46	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
121	S J	75	60	高台付皿	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
122	区南溝	12	62	高台付碗	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
123	O-53	F-7-2	14	高台付碗	二	川ハケヌリ	ヘラ切り
124	S J	27	8	高台付碗	二	川ハケヌリ	ヘラ切り

第 667 表 灰軸陶器一覽 (4)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
125	S B	4	296	高台付 皿	二 川	ハケヌリ	糸切り
126	K-90	表土	31	高台付 皿	二 川	ハケヌリ	糸切
127	S J	162	27	高台付 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
128	S D	25	5	高台付 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
129	S J	155	32	高台付 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
130	S J	241	3	高台付 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
131	土器集中区	Q-16.17	15	高台付 椀	二 川	ハケヌリ	底部不詳
132	K-90	J-10-2	58	高台付 椀	二 川	ハケヌリ	底部不詳
133	K-14	Q-22	10	段 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
134	S J	172	12	段 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
135	K-90	表土	35	輪花付高台付 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
136	K-90	表土	38	段 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
137	S J	I-18	6	段 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
138	S B	50	23	段 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
139	K-90	I-12	34	段 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
140	S J	32	15	段 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
141	S J	127	12	高台付 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
142	S B	53	3	高台付 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
143	集石列	1	1	段 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
144	S J	49	9	段 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
145	K-90	H-13-4	37	段 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
146	K-90	G-10-3	39	段 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
147	S J	197	70	段 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
148	S J	125	3	段 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
149	S B	4	305	三足 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
150	区画溝	6	10	段 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
151	S J	194	10	段 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
152	S K	47	1	耳 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
153	S J	140	39	耳 皿	二 川	ツケがけ	糸切
154	S J	163	1	耳 皿	二 川	ツケがけ	糸切
155	K-90	F-7	56	耳 皿	二 川	ハケヌリ	糸切
156	S J	161	43	耳 皿	二 川	ハケヌリ	糸切
157	区画溝	12	76	耳 皿	二 川	ハケヌリ	糸切
158	S E	2	10	耳 皿	二 川	ハケヌリ	底部不詳
159	K-90	N-14-1	60	蓋 皿	二 川	ハケヌリ	-
160	K-90	M-15-3	59	蓋 皿	二 川	ハケヌリ	-
161	S J	222	22	蓋 皿	二 川	ハケヌリ	-
162	K-90	H-5-1	61	蓋 皿	二 川	ハケヌリ	-
163	S X	3	6	蓋 皿	二 川	ハケヌリ	-
164	S J	199	15	蓋 皿	二 川	ハケヌリ	-
166	S B	54	20	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
167	S B	54	40	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
168	S J	74	1	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
169	S J	75	57	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
170	区画溝	11	8	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
171	S J	220	50	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
172	S J	34	11	高台付 椀	宮 口	無釉	ヘラ切り
173	S J	75	59	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
174	S B	54	34	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り
175	S B	54	41	高台付 椀	宮 口	無釉	ヘラ切り
176	S B	54	36	高台付 椀	宮 口	ハケヌリ	ヘラ切り

第 668 表 灰釉陶器一覽 (5)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
177	S J	161	39	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
178	S B	4	285	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
179	S K	第1土壌群 C	8	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
180	S B	54	17	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
181	S J	49	7	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
182	S B	54	19	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
183	S B	54	21	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
184	S J	199	9	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
185	S J	197	59	高台付碗	宮	口無	ヘラ切り
186	S J	248	45	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
187	S B	54	22	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
188	S J	248	44	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
189	区南溝	7	5	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
190	S B	54	38	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
191	K-90	J-15-1	6	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
192	S J	155	28	高台付碗	宮	口無	ヘラ切り
193	S K	第1土壌群 D	14	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
194	S J	161	37	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
195	S K	272	31	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
196	S J	155	29	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
197	S B	54	24	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
198	S K	第4土壌群 L	21	高台付碗	宮	口無	ヘラ切り
199	S B	54	45	高台付碗	宮	口ヘラ切り	ハケヌリ
200	S J	251	2	高台付碗	宮	口無	ヘラ切り
201	S B	4	288	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
202	S J	197	63	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
203	S J	229	19	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
204	S J	152	31	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
205	S J	46	14	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
206	S J	248	47	高台付碗	宮	口無	ヘラ切り
207	S J	54	23	高台付碗	宮	口無	ヘラ切り
208	S B	4	287	高台付碗	宮	口無	ヘラ切り
209	S B	50	13	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
210	S B	4	289	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
211	S B	55	15	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
212	S K	67	2	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
213	K-90	J-15-2	10	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
214	K-90	J-15-2	33	高台付碗	宮	口無	ヘラ切り
215	K-90	M-15-2	32	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
216	S B	54	18	高台付碗	宮	口無	ヘラ切り
217	S B	4	293	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
218	区南溝	24	10	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
219	S J	114	7	高台付碗	宮	口無	ヘラ切り
220	S J	199	10	高台付碗	宮	口無	ヘラ切り
221	S J	27	5	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
222	S B	54	28	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
223	S B	54	26	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
224	S B	54	25	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
225	S J	202	40	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
226	S B	54	29	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り
227	S B	54	23	高台付碗	宮	口ハケヌリ	ヘラ切り

第669表 灰釉陶器一覽(6)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
228	S J	217	61	高台付椀	宮	口無軸	へラ切り
229	S B	54	42	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
230	S J	227	4	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
231	S J	95	9	高台付輪花椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
232	S B	54	37	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
233	S B	54	33	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
234	S B	54	39	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
235	S B	54	46	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
236	S B	4	298	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
237	K-90	I-16-3	17	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
238	K-90	J-16-2	11	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
239	S B	50	12	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
240	S J	214	20	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
241	S D	25	3	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
242	S J	256	5	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
243	S J	42	7	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
244	S B	42	4	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
245	S J	161	42	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
246	S J	199	13	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
247	S B	54	27	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
248	S B	4	284	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
249	大 甕	714	6	高台付椀	清ヶ谷	口ハケヌリ	へラ切り
250	S B	54	35	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
251	土器集中区	Q-16.17	12	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
253	S B	38	1	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
254	O-53	R-22(23)	4	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
255	S J	48	52	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
256	S D	25	4	高台付椀	宮	口ハケヌリ	底部不詳
257	S J	189	4	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
258	S D	25	2	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
259	K-90	J-16-3	16	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
260	S E	2	7	高台付椀	宮	口無軸	へラ切り
261	S J	185	10	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
262	O-53	表土	13	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
263	S J	161	40	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
264	K-90	J-15-2	15	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
265	K-90	J-14-4	53	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
266	S J	197	62	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
267	S J	238	1	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
268	K-90	I-15-4	19	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
269	区南溝	4	7	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
270	区南溝	22	1	高台付椀	宮	口ハケヌリ	へラ切り
271	S K	第1土壌群 C	9	高台付椀	宮	口ハケヌリ	糸切り
272	S J	14	6	高台付椀	宮	口ツケガケ	糸切り
273	S K	528	4	高台付椀	宮	口ツケガケ	糸切り
274	S J	219	5	高台付椀	宮	口ハケヌリ	底部不詳
275	S J	192	6	高台付椀	宮	口ハケヌリ	底部不詳
276	S B	54	31	高台付椀	宮	口ハケヌリ	底部不詳
278	K-90	9	9	高台付椀	宮	口ハケヌリ	底部不詳
279	S B	54	43	高台付椀	宮	口ハケヌリ	底部不詳
280	S K	第1土壌群 D	15	高台付椀	宮	口ハケヌリ	底部不詳

第 670 表 灰釉陶器一覽 (7)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
281	S B	54	44	高台付腕	宮口	ハケヌリ	底部不詳
282	S J	152	32	高台付腕	宮宮	無	ラ切
283	S J	210	4	高台付腕	宮宮	ハケヌリ	底部不詳
284	S J	219	6	高台付腕	宮宮	ハケヌリ	底部不詳
285	S B	54	32	高台付腕	宮宮	ハケヌリ	底部不詳
286	S J	217	70	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
287	S B	55	11	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
288	S B	54	49	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
289	S J	197	65	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
290	S B	55	7	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
291	区画溝	21	4	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
292	S J	19	28	高台付腕	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
293	S D	41	1	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
294	区画溝	12	69	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
295	S B	54	50	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
296	S B	54	64	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
297	S B	50	19	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
298	K-90	J-15-3	22	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
299	S J	217	73	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
300	S J	217	71	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
301	S J	223	82	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
302	S B	54	51	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
303	S J	240	12	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
304	S B	54	65	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
305	S B	54	52	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
306	S J	171	4	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
307	S J	248	46	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
308	S J	226	23	高台付腕	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
309	S J	40	6	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
310	S J	217	69	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
311	S J	223	78	輪花付高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
312	S J	197	64	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
313	S K	第 4 土壌群 G	6	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
314	S B	54	66	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
315	S B	54	59	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
317	S J	173	18	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
318	S J	191	12	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
319	S B	54	61	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
320	S B	54	62	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
321	S K	第 4 土壌群 L	22	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
322	K-90	M-12-4	23	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
323	S B	54	53	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
324	S J	152	35	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
325	S J	197	66	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
326	S J	181	1	高台付皿	宮宮	無	ヘラ切
327	S J	65	9	高台付皿	宮宮	無	ヘラ切
328	S J	46	13	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
329	S J	207	11	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
330	K-90	I-14-4	43	高台付腕	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
331	S J	222	25	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切
332	区画溝	12	72	高台付皿	宮宮	ハケヌリ	ヘラ切

第 671 表 灰軸陶器一覽 (8)

番号	造構種類	造構番号	番 号	器 種	産 地	施軸方法	底部調整
333	表土 K-90	M-14-3	49	高台付 碗 卍	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
334	S J	152	36	高台付 皿	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
335	S J	191	14	高台付 碗	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
336	S B	54	56	高台付 皿	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
337	S B	54	55	高台付 皿	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
338	S B	54	63	高台付 皿	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
339	S K	第 4 土織群	38	高台付 皿	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
340	S K	第 2 土織群	45	高台付 皿	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
341	K-90	O-16-2	26	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
342	S J	211	3	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
343	S J	193	2	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
344	K-90	表 土	25	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
345	K-90	O-17	28	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
346	S B	50	17	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
347	S J	217	72	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
348	S B	54	57	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
349	S B	54	58	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
350	K-90	J-15	24	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
351	S B	54	60	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
352	S B	4	303	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
353	区画溝	22	2	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
354	区画溝	31	1	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
355	K-90	M-15-2	52	高台付 碗 卍	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
356	S B	55	10	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
357	S B	50	18	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
358	S B	44	4	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
359	S B	55	9	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
360	S B	54	68	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
361	S B	54	69	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
362	S B	54	67	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
363	ピット	P-23	1	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
364	S K	3	3	高台付 付	宮 口	ハケヌリ	糸 切り
365	S J	219	4	高台付 付	宮 口	ツケガケ	糸 切り
366	S J	416	10	高台付 付	宮 口	ツケガケ	糸 切り
367	S J	256	4	輪花付 付	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
368	S J	252	4	輪花付 段	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
369	S B	54	77	段	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
370	S B	54	71	段	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
371	S B	54	74	段	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
372	S J	49	8	段	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
373	S J	171	5	段	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
374	S B	54	76	段	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
375	区画溝	4	8	段	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
376	S B	54	75	段	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
378	S B	54	72	段	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
379	S D	28	3	段	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
380	S B	54	70	段	宮 口	ハケヌリ	へラ切り
381	S B	33	2	段	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
382	K-90	H-5-1	40	段	宮 口	ハケヌリ	底部不詳
383	S J	152	34	段	宮 口	無 輪	底部不詳
384	S B	54	73	段	宮 口	ハケヌリ	底部不詳

第 672 表 灰軸陶器一覽 (9)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
385	K-90	J-12-4	36	輪花付高台付皿	宮口	ハケヌリ	底部不詳
386	O-53	表土	29	輪花付段皿	宮二	ハケヌリ	底部不詳
387	S B	54	79	耳皿	川口	ハケヌリ	糸切
388	S B	54	78	耳皿	宮川	ハケヌリ	ヘラ切
389	S J	228	4	耳皿	宮口	ハケヌリ	ヘラ切
390	S B	4	167	耳皿	宮口	ハケヌリ	糸切
391	S J	162	32	耳皿	宮口	ハケヌリ	糸切
392	S K	第 2 土壌群	47	耳皿	宮口	ハケヌリ	底部不詳
393	S K	502	1	耳皿	宮口	ハケヌリ	糸切
394	K-90	F-7-2	55	耳皿	宮口	ハケヌリ	底部不詳
395	O-53	J-11-1	33	耳皿	宮口	ハケヌリ	底部不詳
396	S J	10	13	短頸台付	宮清	ハケヌリ	ヘラ削
397	S B	54	30	高台付	ケケ	ハケヌリ	ヘラ切
398	S J	75	56	高台付	ケケ	ハケヌリ	ヘラ切
399	区南溝	21	3	高台付	清ケ	ツケガケ	ヘラ切
400	S J	36	43	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
401	S J	199	14	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
402	S J	217	66	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
403	S J	172	11	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
404	S J	18	28	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
405	S J	197	69	高台付	清ケ	ツケガケ	ヘラ切
406	O-53	M-15-2	3	高台付	清ケ	ツケガケ	ヘラ切
407	K-90	J-15-2	7	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
408	S J	217	64	高台付	清ケ	ケケ	無釉
409	S J	161	38	高台付	清ケ	ハケヌリ	底部不詳
410	S J	197	67	高台付	清ケ	ケケ	無釉
411	S J	115	2	高台付	清ケ	ケケ	無釉
412	区南溝	12	64	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
413	S J	155	30	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
414	S J	112	30	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
415	S J	207	9	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
416	S J	36	42	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
417	ビット		1	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
418	S D	24	2	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
419	S J	222	23	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
420	S J	219	7	高台付	清ケ	ケケ	無釉
421	区南溝	2	1	高台付	清ケ	ケケ	無釉
422	S B	4	297	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
423	区南溝	7	4	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
424	S J	228	3	高台付	清ケ	ケケ	無釉
425	S J	199	11	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
426	S J	162	29	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
427	土器集中区	Q-16.17	13	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
428	S J	197	58	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
429	S J	75	58	高台付	清ケ	ハケヌリ	底部不詳
430	S J	217	62	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
431	S J	53	68	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
433	S K	199	1	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
434	S B	50	11	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
435	S J	202	41	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切
436	S J	148	5	高台付	清ケ	ハケヌリ	ヘラ切

第673表 灰釉陶器一覽(10)

番号	遺構種類	遺構番号	番 号	器 種	産 地	施釉方法	底部調整
437	S J	27	7	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
438	S J	185	9	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
439	S K	第3土壌群F	5	高台付碗	清ヶ谷	無	へう切り
440	S B	4	302	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
441	S J	75	61	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
442	S J	217	67	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
443	K-90	表土	8	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
444	S J	118	15	高台付碗	清ヶ谷	無	へう切り
445	S B	4	292	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
446	S J	36	41	高台付碗	清ヶ谷	無	へう切り
447	S K	553	6	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
448	S J	114	8	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
449	S B	50	16	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
450	K-90	R-11-3	48	高台付碗 <small>少</small>	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
451	S J	217	68	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
452	S J	248	43	高台付碗	清ヶ谷	無	へう切り
453	S J	240	10	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
454	S J	36	39	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
455	S J	134	9	高台付碗	清ヶ谷	無	へう切り
456	区画溝	11	7	高台付碗	清ヶ谷	不詳	へう切り
457	S X	2	9	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
458	K-90	R-16-2	18	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
459	O-53	R-11-1	20	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
460	S K	297	2	高台付碗	清ヶ谷	ツケガケ	へう切り
461	S J	217	63	高台付碗	清ヶ谷	ツケガケ	へう切り
462	S J	14	5	高台付碗	清ヶ谷	ツケガケ	へう切り
463	S J	78	7	高台付碗	清ヶ谷	ツケガケ	へう切り
464	S J	247	11	高台付碗	清ヶ谷	無	糸切り
465	S K	325	1	高台付碗	清ヶ谷	ツケガケ	糸切り
466	S J	59	13	高台付碗	清ヶ谷	無	糸切り
467	S J	16	9	高台付碗	清ヶ谷	無	糸切り
468	S J	227	5	高台付碗	清ヶ谷	ツケガケ	糸切り
469	S J	68	2	高台付碗	清ヶ谷	無	糸切り
470	S B	50	20	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	糸切り
471	S B	4	301	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	糸切り
472	K-14	D-5-4	1	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
473	S J	27	6	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
474	区画溝	14	6	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
475	区画溝	6	9	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
476	S J	122	9	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
477	区画溝	14	7	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
478	S J	152	33	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
479	S B	55	8	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
480	ピット	H-12	1	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
481	S J	226	24	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
482	区画溝	14	8	高台付皿	清ヶ谷	無	へう切り
483	S J	172	14	皿	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
484	S J	223	84	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
485	K-90	J-15	21	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
486	S J	55	4	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り
487	S J	252	5	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	へう切り

第 674 表 灰軸陶器一覽 (11)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施軸方法	底部調整
488	S B	4	299	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
489	S J	240	13	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
490	O-53	L-7	9	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
491	K-90	G-10-4	42	高台付碗か	無	軸	ヘラ切り
492	S J	172	13	皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
493	K-90	J-12-1	44	高台付碗か	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
494	K-90	R-14-2	47	高台付碗か	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
495	S J	54	27	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
496	S K	644	1	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
497	S J	191	15	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
498	S D	1	13	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
499	S J	135	16	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
500	S J	145	9	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
501	S B	4	290	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
502	S J	55	5	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
503	S J	48	53	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
504	区西溝	12	66	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
505	S J	46	15	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
506	S K	294	1	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
507	S K	347	3	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
508	区西溝	12	61	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
509	K-90	J-7-2	50	高台付碗か	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
510	K-90	J-11-3	51	高台付碗か	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
511	S J	238	2	高台付碗	清ヶ谷	無	軸
512	S K	第1土壇群O	44	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
513	S J	248	48	高台付皿	清ヶ谷	無	軸
514	K-90	P-17-2	30	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
515	S B	54	54	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
516	S J	207	10	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
517	S B	4	295	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
518	S J	222	24	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	ヘラ切り
519	K-90	J-15-4	27	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
520	S E	2	8	高台付皿	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
520	S J	202	45	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	ヘラ切り
521	S J	189	6	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
522	S J	218	6	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
523	S J	229	20	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
524	区西溝	12	65	高台付碗	清ヶ谷	無	軸
525	S J	18	29	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
526	S J	189	7	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
527	K-90	表土	41	高台付碗か	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
528	S J	109	16	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
529	S K	272	32	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
530	S J	53	69	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
531	区西溝	12	73	高台付皿	清ヶ谷	無	軸
532	S J	199	12	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
533	S J	155	31	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
534	S J	257	2	高台付皿	清ヶ谷	無	軸
535	S J	192	7	高台付皿	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
536	O-53	S-22-3	8	高台付碗	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
537	S J	118	17	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	ヘラ切り

第675表 灰釉陶器一覽(12)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
538	K-90	O-17	29	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	ヘラ切り
539	S J	225	6	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	ヘラ切り
540	S J	217	74	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	糸切り
541	O-53	R-19-1	19	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	糸切り
542	S K	359	1	高台付皿	清ヶ谷	ツケガケ	糸切り
543	S B	50	22	段	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
544	S J	156	2	段	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
545	S J	53	72	高台付段	清ヶ谷	ハケヌリ	ヘラ切り
546	S D	23	2	段	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
547	S J	223	86	耳	清ヶ谷	無釉	ヘラ切り
548	O-53	J-11-1	30	耳	清ヶ谷	無釉	糸切り
549	表土 K-90	G-4-3	54	耳	清ヶ谷	無釉	糸切り
550	ピット	G-4	1	鉄鉢	清ヶ谷	ハケヌリ	底部不詳
551	S J	70	2	円盤	清ヶ谷	不詳	糸切り
552	S J	65	8	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
553	区画溝	24	11	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
554	区画溝	20	5	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
555	区画溝	12	60	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
556	S J	37	46	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
557	区画溝	6	7	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
558	K-90	J-14-3	46	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
559	土器集中区	Q-16-17	16	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
560	S J	87	33	高台付輪花碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
561	K-90	J-15-1	2	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
562	S K	第1土壌群C	10	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
563	S J	170	8	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
564	S J	207	8	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
565	S J	223	81	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
566	S J	18	27	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
567	S J	202	42	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
568	S J	88	8	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
569	S J	164	6	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
570	土器集中区	Q-16-4	17	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
571	S B	4	286	高台付碗	東濃	ハケヌリ	糸切り
572	S J	235	8	高台付碗	東濃	ハケヌリ	糸切り
573	S J	59	14	高台付碗	東濃	ハケヌリ	糸切り
574	ピット	E-6	1	高台付碗	東濃	ハケヌリ	底部不詳
575	S D	23	1	高台付碗	東濃	ハケヌリ	ヘラ切り
576	S K	210	1	輪花付高台付碗	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
577	S J	136	9	高台付碗	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
578	S J	188	9	高台付碗	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
579	S J	31	39	高台付碗	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
580	O-53	E-6-2	5	高台付碗	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
581	S J	87	35	高台付碗	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
582	S J	197	61	高台付碗	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
583	S J	104	19	高台付碗	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
584	S J	10	11	高台付碗	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
585	S J	91	5	高台付碗	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
586	S J	54	22	高台付碗	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
587	S B	65	1	高台付碗	東濃	ツケガケ	ヘラ切り
588	S K	120	2	高台付碗	東濃	ツケガケ	ヘラ切り

第676表 灰釉陶器一覽(13)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整	
589	O-53	風洞木痕	16	高台付	里東	濃	ツケガケ	ヘラ切り
590	O-53	E-3-2	27	段	里東	濃	ツケガケ	ヘラ切り
591	K-90	風洞木痕	12	高台付	椀東	濃	ツケガケ	糸切り
592	S J	36	38	高台付	椀東	濃	ツケガケ	糸切り
593	S J	78	6	高台付	椀東	濃	ツケガケ	糸切り
594	S J	59	12	高台付	椀東	濃	ツケガケ	糸切り
595	S J	58	4	高台付	椀東	濃	ツケガケ	糸切り
596	S J	9	5	高台付	椀東	濃	ツケガケ	糸切り
597	S J	57	5	高台付	椀東	濃	ツケガケ	糸切り
598	S J	31	41	長頸	里東	濃	ツケガケ	糸切り
599	区画溝	6	8	高台付	椀東	濃	ツケガケ	糸切り
600	S B	65	2	高台付	椀東	濃	ツケガケ	糸切り
601	S J	19	29	高台付	椀東	濃	ツケガケ	糸切り
602	S J	88	10	高台付	椀東	濃	ツケガケ	糸切り
603	S J	35	49	高台付	椀東	濃	ツケガケ	糸切り
604	S D	1	14	高台付	椀東	濃	ツケガケ	糸部不詳
605	S X	1	7	輪花付高台付	椀東	濃	ツケガケ	底部不詳
606	S J	29	3	高台付輪花	椀東	濃	ツケガケ	底部不詳
607	S B	3	5	輪花付高台付	椀東	濃	ツケガケ	底部不詳
608	ピット	J-11P5	1	高台付	椀東	濃	ツケガケ	底部不詳
609	S J	112	31	高台付輪花	椀東	濃	ハケスリ	糸切り
610	S J	122	11	高台付輪花	椀東	濃	ツケガケ	底部不詳
611	S J	118	16	高台付	椀東	濃	ツケガケ	底部不詳
612	S J	88	9	高台付	椀東	濃	ツケガケ	底部不詳
613	S J	122	10	高台付	椀東	濃	ツケガケ	底部不詳
614	S J	87	34	高台付	椀東	濃	ツケガケ	底部不詳
615	O-53	I-12	1	高台付	椀東	濃	ツケガケ	底部不詳
616	S J	126	4	高台付	椀東	濃	ツケガケ	底部不詳
617	O-53	C-5-3	6	高台付	椀東	濃	ツケガケ	底部不詳
618	S J	163	2	高台付	里東	濃	ハケスリ	ヘラ切り
619	S K	169	1	高台付	椀東	濃	ハケスリ	ヘラ切り
621	S J	240	11	高台付	里東	濃	ハケスリ	ヘラ切り
622	S J	189	5	高台付	里東	濃	ハケスリ	ヘラ切り
623	K-90	J-15-3	20	高台付	里東	濃	ハケスリ	ヘラ切り
624	S J	12	2	高台付	里東	濃	ハケスリ	ヘラ切り
625	S J	53	71	高台付	椀東	濃	ハケスリ	ヘラ切り
626	S J	54	28	高台付	椀東	濃	ハケスリ	ヘラ切り
627	区画溝	31	2	高台付	里東	濃	ハケスリ	ヘラ切り
628	O-53	J-7-2	18	高台付	里東	濃	ハケスリ	糸切り
629	S J	202	43	高台付	里東	濃	ツケガケ	ヘラ切り
630	S J	167	3	高台付	里東	濃	ツケガケ	ヘラ切り
631	S K	238	5	高台付	里東	濃	ツケガケ	ヘラ切り
632	S B	3	3	高台付	里東	濃	ツケガケ	ヘラ切り
633	S J	54	25	高台付	里東	濃	ツケガケ	ヘラ切り
634	S J	191	13	高台付	椀東	濃	ツケガケ	ヘラ切り
635	S J	154	2	高台付	里東	濃	ツケガケ	ヘラ切り
636	O-53	E-6-3	31	高台付	里東	濃	ツケガケ	ヘラ切り
637	S J	54	24	高台付	椀東	濃	ツケガケ	ヘラ切り
638	S E	1	33	高台付	里東	濃	ツケガケ	ヘラ切り
639	S B	50	21	高台付	里東	濃	ツケガケ	ヘラ切り
640	O-53	I-12-3	25	段	里東	濃	ツケガケ	ヘラ切り

第677表 灰釉陶器一覽(14)

番号	造構種類	造構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
641	S J	121	11	高台付	鳳東	濃ツケガケ	ヘラ切り
642	S J	51	8	高台付	鳳東	濃ツケガケ	切り
643	S J	118	18	高台付	鳳東	濃ツケガケ	系切り
644	O-53	M-10	24	段	鳳東	濃ツケガケ	系切り
645	S J	104	18	高台付	鳳東	濃ツケガケ	系切り
646	S J	36	44	高台付	鳳東	濃ツケガケ	系切り
647	S J	94	2	高台付	鳳東	濃ツケガケ	系切り
648	O-53	E-7-4	32	高台付	鳳東	濃ツケガケ	系切り
649	S J	8	3	高台付	鳳東	濃ツケガケ	系切り
650	O-53	G-10-1	21	高台付	鳳東	濃ツケガケ	系切り
651	S D	1	15	高台付	鳳東	濃ハケスリ	底部不評
652	S J	178	8	高台付	腕東	濃ツケガケ	底部不評
653	区画溝	23	8	高台付	腕東	濃ツケガケ	底部不評
654	S E	1	32	高台付	腕東	濃ツケガケ	底部不評
655	S J	57	6	高台付	腕東	濃ツケガケ	底部不評
656	区画溝	12	68	輪花付高台付	腕東	濃ツケガケ	底部不評
657	S J	188	11	高台付	腕東	濃ツケガケ	底部不評
658	S J	54	26	高台付	腕東	濃ツケガケ	底部不評
659	S J	SB-4	306	高台付	腕東	濃ツケガケ	底部不評
660	ピット	L-13	1	高台付	腕東	濃ツケガケ	底部不評
661	O-53	R-10-4	26	段	腕東	濃ハケスリ	底部不評
662	S B	4	304	段	腕東	濃ハケスリ	底部不評
663	S J	162	26	段	腕東	濃ツケガケ	底部不評
664	S J	188	12	三足	盤東	濃ツケガケ	底部不評
665	S B	47	1	耳	腕東	濃ハケスリ	系切り
666	S J	207	12	耳	腕東	濃ハケスリ	系切り
667	K-90	O-12-1	57	耳	腕東	濃ハケスリ	系切り
668	S J	217	75	耳	腕東	濃ハケスリ	系切り
669	S J	203	18	長頸	壺狭	投瓶	頸類
670	S J	203	19	長頸	壺狭	投瓶	頸類
671	区画溝	22	3	長頸	壺二	川瓶	頸類
672	K-90	表土	63	長頸	壺二	川瓶	頸類
673	S J	152	45	長頸	壺二	川瓶	頸類
674	S J	58	8	長頸	壺二	川瓶	頸類
675	S B	50	35	長頸	壺二	川瓶	頸類
676	S B	55	19	長頸	壺二	川瓶	頸類
677	O-53	表土	37	長頸	壺二	川瓶	頸類
678	S J	35	69	長頸	壺二	川瓶	頸類
679	S K	第1土壌群	25	長頸	壺二	川瓶	頸類
680	S J	238	3	長頸	壺二	川瓶	頸類
681	K-90	J-12-1	67	長頸	壺二	川瓶	頸類
682	S K	201	4	広口長頸	壺二	川瓶	頸類
683	S K	347	7	長頸	壺二	川瓶	頸類
684	S B	53	4	長頸	壺二	川瓶	頸類
685	S J	26	12	長頸	壺二	川瓶	頸類
686	S K	347	8	長頸	壺二	川瓶	頸類
687	区画溝	2	2	長頸	壺二	川瓶	頸類
688	S J	43	2	長頸	壺二	川ハケスリ	ヘラ切り
689	S J	199	24	長頸	壺宮	口無瓶	頸類
690	S B	55	18	長頸	壺宮	口無瓶	頸類
691	S J	203	20	長頸	壺宮	口無瓶	頸類

第678表 灰軸陶器一覽(15)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施軸方法	底部調整
692	S J	248	66	長頸瓶	宮口	瓶	類
693	S B	55	22	長頸壺	宮口	瓶	類
694	K-90	M-15-4	65	長頸壺	宮口	ハケ	スリ
695	S B	54	82	長頸壺	宮口	瓶	類
696	S B	54	83	長頸壺	宮口	瓶	類
697	区函溝	16	6	把手付長頸壺	宮口	瓶	類
698	S B	54	84	長頸壺	宮口	瓶	類
699	S J	219	8	長頸壺	宮口	瓶	類
700	S J	152	47	長頸壺	宮口	瓶	類
701	S J	14	8	壺底部	宮口	ハケ	スリ
702	S J	247	18	長頸壺	宮口	瓶	類
703	K-14	D-6-3	11	長頸壺	宮口	瓶	類
704	S J	245	21	長頸壺	宮口	瓶	類
705	S B	50	46	長頸壺	宮口	瓶	類
706	S J	189	13	長頸壺	宮口	瓶	類
707	S B	55	24	長頸壺	宮口	瓶	類
708	S J	188	18	長頸壺	宮口	瓶	類
709	S E	2	13	長頸壺	宮口	瓶	類
710	S J	204	24	長頸壺	宮口	瓶	類
711	S J	202	61	長頸壺	宮口	瓶	類
712	S J	25	10	長頸壺	宮口	瓶	類
713	S B	50	40	長頸壺	清ヶ	瓶	類
714	S J	197	86	長頸壺	清ヶ	瓶	類
715	S B	53	5	長頸壺	清ヶ	瓶	類
716	S B	50	37	長頸壺	清ヶ	瓶	類
717	S J	188	17	長頸壺	清ヶ	瓶	類
718	S J	31	58	長頸壺	清ヶ	瓶	類
719	S J	223	110	長頸壺	清ヶ	瓶	類
720	S J	48	74	広口長頸壺	清ヶ	瓶	類
721	大壺	714	10	広口壺	清ヶ	瓶	類
722	K-90	R-9-1	64	広口壺	清ヶ	瓶	類
723	S K	283	4	長頸壺	清ヶ	瓶	類
724	ビット	P-17	1	長頸壺	清ヶ	瓶	類
726						瓶	類
727	S J	170	12	長頸壺	清ヶ	瓶	類
728	O-53	G-7-4	36	長頸壺	清ヶ	瓶	類
729	S J	247	17	長頸壺	清ヶ	瓶	類
730	S J	235	15	長頸壺	清ヶ	瓶	類
731	S J	192	10	長頸壺	清ヶ	瓶	類
732	S J	45	18	長頸壺	清ヶ	瓶	類
733	S J	53	82	長頸壺	清ヶ	瓶	類
734	S B	55	21	長頸壺	清ヶ	瓶	類
735	S B	55	20	長頸壺	清ヶ	瓶	類
736	S B	50	36	長頸壺	清ヶ	瓶	類
737	S J	148	8	長頸壺	清ヶ	瓶	類
738	S B	46	2	長頸壺	清ヶ	瓶	類
739	S J	162	39	長頸壺	清ヶ	瓶	類
740	S B	55	23	長頸壺	清ヶ	瓶	類
741	S J	223	112	長頸壺	清ヶ	瓶	類
742	S B	50	48	長頸壺	清ヶ	瓶	類
743	S B	50	47	長頸壺	清ヶ	瓶	類

第 679 表 灰釉陶器一覽 (16)

番号	造 構 種 類	選 構 番 号	番 号	器 種	産 地	施 軸 方 法	底 部 調 整
744	S J	207	15	長 頸 壺	清 ケ ケ 谷	瓶 類	
745	S J	220	62	長 頸 類	清 ケ ケ 谷	瓶 類	
746	S J	10	15	長 頸 壺	清 ケ ケ 谷	瓶 類	
747	S K	第 1 土 城 群 N	42	長 頸 類	清 ケ ケ 谷	瓶 類	
748	区 画 溝	12	78	長 頸 類	清 ケ ケ 谷	瓶 類	
749	S J	194	12	長 頸 類	清 ケ ケ 谷	瓶 類	
750	S K	618	2	長 頸 類	清 ケ ケ 谷	瓶 類	
751	区 画 溝	20	6	長 頸 類	清 ケ ケ 谷	瓶 類	
752	S J	189	14	長 頸 類	清 ケ ケ 谷	瓶 類	
753	K-90	M-15-4	69	長 頸 類	清 ケ ケ 谷	瓶 類	
754	S J	53	83	長 頸 類	清 ケ ケ 谷	瓶 類	
755	S K	第 1 土 城 群 C	11	長 頸 類	清 ケ ケ 谷	瓶 類	
756	S J	161	51	長 頸 類	清 ケ ケ 谷	瓶 類	
757	S J	235	14	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
758	S B	50	39	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
759	S J	162	37	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
760	S J	36	64	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
761	区 画 溝	31	3	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
762	S J	197	87	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
763	S J	150	20	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
764	区 画 溝	13	32	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
765	S J	162	38	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
766	S J	245	20	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
767	S J	189	10	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
768	S J	229	25	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
769	S J	161	50	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
770	S J	57	12	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
771	S B	4	314	広 口 長 頸 壺	東 濃	瓶 類	
772	S B	54	85	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
773	S J	27	13	広 口 壺	二 川	瓶 類	
774	S J	14	9	広 口 壺	二 川	瓶 類	
775	S J	8	7	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
776	S E	1	37	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
777	S B	50	38	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
778	S J	9	8	長 頸 類	二 川	瓶 類	
779	S D	5	3	長 頸 類	東 濃	瓶 類	
780	S J	203	22	短 頸 類	二 川	瓶 類	
781	S B	50	50	短 頸 類	二 川	瓶 類	
782	区 画 溝	6	11	短 頸 類	二 川	瓶 類	
783	区 画 溝	11	12	短 頸 類	二 川	ハ ケ ス リ	ヘ ラ 切 リ
784	区 画 溝	22	4	甕	不 詳	瓶 類	
785	S J	10	14	手 付 付	瓶 類	投 入	
786	S B	50	33	手 付 付	瓶 類	投 入	
787	S J	192	9	手 付 付	二 川	瓶 類	
788	区 画 溝	16	9	手 付 付	二 川	瓶 類	
789	区 画 溝	32	2	手 付 付	二 川	瓶 類	
790	K-90	M-13	66	長 頸 類	二 川	瓶 類	
791	S K	428	1	手 付 付	二 川	瓶 類	
792	S B	50	32	手 付 付	二 川	瓶 類	
793	O-53	I-15	41	手 付 付	二 川	ハ ケ ス リ	糸 切 リ
794	S B	50	30	手 付 付	宮 口	瓶 類	

第 680 表 灰釉陶器一覽 (17)

番号	遺構種類	遺構番号	番号	器種	産地	施釉方法	底部調整
795	K-90	G-6-4	68	手付瓶	清ヶ谷	瓶	類
796	O-53	J-15-2	39	小瓶	東濃	瓶	類
797	S B	33	1	小瓶	東濃	瓶	類
798	区画溝	14	9	小瓶	二川	瓶	類
799	S E	1	36	小瓶	二川	瓶	類
800	O-53	G-4	38	小瓶	二川	ハケヌリ	糸切り
801	区画溝	13	30	小瓶	二川	瓶	類
802	S J	217	92	小瓶	宮口	糸切り	ハケヌリ
803	S B	54	81	小瓶	宮口	瓶	類
804	S B	4	313	小瓶	宮口	瓶	類
805	S B	50	24	段皿	宮口	瓶	類
806	S J	223	115	長頸瓶	清ヶ谷	瓶	類
807	S J	172	20	小瓶	清ヶ谷	瓶	類
808	S J	202	62	小瓶	東濃	瓶	類
809	O-53	S-15-2	34	小瓶	東濃	瓶	類
810	S J	19	30	壺	東濃	瓶	類
811	O-53	M-12-4	35	小瓶	東濃	瓶	類
812	S E	3	4	長頸壺		瓶	類
813	K-90	F-5-1	71	平瓶	二川	瓶	類
814	S J	249	24	平瓶	二川	瓶	類
815	S B	50	28	手付瓶	二川	瓶	類
816	S J	248	67	手付長頸瓶	狭投	瓶	類
817	区画溝	20	7	手付瓶(把手)	二川	瓶	類
818	大甕	720	6	把手	二川	瓶	類
819	S B	50	29	手付瓶	狭投	瓶	類
820	区画溝	12	77	四耳壺	二川	瓶	類
821	S B	54	87	手付瓶	宮口	瓶	類
822	S B	54	86	手付瓶	宮口	瓶	類
823	区画溝	21	5	手付瓶	二川	ハケヌリ	ヘラ切り
824	O-53	N-15-1	40	長頸壺	二川	瓶	類
825	S B	4	315	長頸壺	宮口	瓶	類
826	S B	55	25	器形不詳	宮口	瓶	類
827	K-90	S-16-3	70	手付瓶	清ヶ谷	瓶	類
828	S J	223	117	大甕	清ヶ谷	瓶	類
829	区画溝	13	33	広口壺	不詳	瓶	類
830	S J	189	16	大甕	清ヶ谷	瓶	類

514から534の高台は、高い高台で爪形か三日月状である。513の高台は、三角状である。

535・536は、底部を欠損し、高台形態は、不詳である。

537から539は、つけかけによる施釉で、底部調整はヘラキリである。高台は3点とも異なる。

540から542は、つけかけによる施釉で、底部調整は糸切りである。高台は、端部の丸い三角形状である。

543から546は、段皿である。刷毛塗りによる施釉で、

底部調整はヘラキリである。高台は低く、三日月状である。

547から549は、耳皿である。全て無釉で、547の底部調整はヘラキリ、他は糸切りである。

550は、口縁部のみの破片であるが、鉄鉢模倣碗と考えた。口縁部が、わずかに刷毛塗り施釉されている。

551は、両面に糸切り痕の残る円盤状製品で、焼成・胎土は灰釉陶器と一致し、これで完形である。耳皿の

底部が浮腫したものか。

713から756は、長頸壺である。頸部の内外面と肩部に施釉される。肩の張りの高い卵形の胴部で、頸部は細い。721・722は、広口長径瓶となる可能性が高い。

795は、大形の瓶である。806・807は、小形の瓶である。807は、いっまる壺Gの可能性もある。

827の器形は不詳であるが、灰釉陶器である。828から830は、口縁部に灰釉のみられる大形の甕である。関東地方では生産された可能性は低く、ここに掲載した。

東濃 東濃の諸窯跡群で生産された可能性のある製品は、552から668、757から779、796・808から812の134点である。

(高台付椀) 552から617は、高台付椀である。552から570は、刷毛塗りで施釉され、底部調整はヘラキリである。552から555は、低い高台で、552は角高台である。他は低い三日月高台である。

556から559は、低い三角形の高台である。559は、面取りをされている。

560から570は、高い高台である。568・569は、三日月高台であり、他は垂直に細長く伸びる。後者には、大形の製品と、やや小型の製品がある。560には輪花がみられる。570は高台が欠損するが、ここに掲載した。

571から573は、刷毛塗りで施釉され、底部調整は糸切りである。高台は低い爪形である。

574・575は、口縁部のみの破片で、刷毛塗りでされている。

576から591は、つががけによる施釉で、底部調整はヘラキリである。576から584は、高い爪形である。585から591は、低い三角形の高台である。576には輪花がみられる。

592から603は、つががけによる施釉で、底部調整は糸切りである。高台は概して低く、三角形から小凸帯状である。595・596は大形だが、他は小振りである。

604から617は、つががけによる口縁部のみの資料で

ある。604から610は、口縁部に輪花がつく。

618から660は、高台付皿である。618から627までは、刷毛塗りによって施釉され、底部調整はヘラキリである。618から624までは、高台が低く外方へ踏ん張る形態である。

625は、高台と底部の接地幅が広く、三角形の高台である。626・627は、小さな高台で端部は円形である。

628は、刷毛塗りによる施釉で、底部調整は糸切りである。高台は三角形である。

629から641は、つががけによる施釉で、底部調整はヘラキリである。高台は小さく、三日月状から三角形までである。

642から650は、つががけによる施釉で、底部調整は糸切りである。642・643は、端部が丸く、小さな角高台である。645から648は、小さな三角形の高台である。649・650は、やや高めの高台で、外方へ伸びている。

651から660は、口縁部のみの破片で、651のみ刷毛塗りで、他はつががけによつて施釉されている。656は、口縁部に輪花がつく。

661から663は、段皿である。661・662が刷毛塗りによつて施釉され、663は、つががけによつて施釉されている。661のみ高台部が確認できる。三角形である。664は、段皿か三足盤と考えた。

665から668は、耳皿である。665から667までは刷毛塗りによる施釉で、底部調整は糸切りであるが、668は、ヘラキリである。高台の付く耳皿はみられない。

757から779は、長頸壺である。757から772は、細い頸部の長頸壺である。773から779は、広口の長頸壺である。両者とも口縁部から肩部にかけて施釉がみられる。

796は、大形の瓶である。808から810は、小形の瓶である。811は、広口長頸壺である。812は、細頸の長頸壺である。

さて次に以上の特色から、中堀遺跡から出土した灰釉陶器(供膳具)の窯式について、若干記しておくこととしたい。

窯投窯跡群の製品とした1から17は、斎藤孝正氏の

30から59、91から124は、黒笹90号窯式新段階併行、60から84、125から137、153から157は、黒笹90号窯式末から折戸53号窯式古段階併行、85・86は、折戸53号窯式新段階併行と、それぞれ位置付けた。

遠江西部の宮口窯跡産の灰釉陶器についても、猿投窯跡群の窯式名称を便宜的に用いる。166から396は、宮口窯跡群産として一群である。このうち286から288は、黒笹14号窯式新段階併行、289から290は、黒笹90号窯式古段階併行、166から271・274から285、291から363、368から385、387から390は、黒笹90号窯式新段階併行、272・273・365・366、391から395は、折戸53号窯式併行とそれぞれ位置付けた。

遠江東部の清ヶ谷窯跡産の灰釉陶器についても、猿投窯跡群の窯式名称を便宜的に用いる。397から551は、清ヶ谷窯跡群産として一群である。397から459、480から539は、黒笹90号窯式新段階併行、460から471、540から547は、折戸53号窯式併行とそれぞれ位置付けた。

東濃地方産の灰釉陶器は、田口正二氏の窯式編年案に従う。552から668は、東濃産の灰釉陶器である。552から575、618から627は、光ヶ丘窯式段階、576から585、628から630は、大原窯式段階、586から616、631から650は、虎溪山1号窯式から丸石2号窯式段階にそれぞれ位置づけられよう。

灰釉陶器の産地別消費量の推移

前に記した基準に基づき、灰釉陶器の産地別出土量の推移について、第923図を参照し述べたい。なおこの図は、灰釉陶器の型式変化に基づき、出土量の推移を扱ったのではなく、各住居跡の帰属する時期に伴出した灰釉陶器の出土量の推移を図化した。それは、搬入品にまみられる伝世の現象を考慮したからである。

さて、まず猿投産の灰釉陶器である。Ⅱ期からⅧ期にかけては、出土量はきわめて少ないが、出土している。ことに出土量が少ないⅡ・Ⅲ期にみられ、重視しておく必要がある。

続いて二川産の灰釉陶器は、中郷遺跡の消長とも

に、その出土量の推移を伺うことができる。Ⅲ・Ⅳ期は、徐々に出土量の増加する段階である。それがⅤ期になると、一気に出土量を増加させピークとなる。

そしてⅥ期は、やや出土量を減らすか、それほど大きな変化となつては現れない。ここに二川産の製品の特徴がみられる。ことに高台付碗の出土量の上昇は、清ヶ谷産の灰釉陶器でも確認でき、遺跡全体が、衰退化の現象にある中で背反した姿を示す。

その後、Ⅶ期になると急速に激減し、Ⅷ期にやや持ち直すか、Ⅸ期には再び少なくなる。

宮口産の灰釉陶器もⅤ期までは、二川産と共通した推移をたどる。しかしⅥ期に消費量は、半減以下となり、Ⅶ期には、数点が確認できるだけとなる。しかしⅧ期には、再び10点ほど認められる。

清ヶ谷産の灰釉陶器の場合は、宮口産の推移のあり方と共通する。しかし他に比べ壺類の多さが目立つ。やはりⅤ期に急速な上昇とピークをみ、その後衰退していく。とくにⅤ・Ⅵ期ともにその出土量は、他者よりも多い。

これら東海地方の海岸部である三河から駿河の窯跡群で生産されたと推定した灰釉陶器は、中郷遺跡では、共通した推移をたどることが確認できた。この推移は、土師器や末野・藤岡地域の須恵器供膳具が、たどった消費量の推移と共通し、土器の流通を考えたとき、興味深い内容を示してくれよう。

ところが、東濃の製品は、異なった推移を示す。その出現は、Ⅴ・Ⅵ期からみられるが、やはり急速に出土量を増すのは、Ⅴ期である。そしてⅦ期にピークに達し、他の東海諸窯の製品と比肩するほどになる。Ⅷ期に消費量を増加させたのは、東濃の製品だけである。Ⅷ期にやはり消費量は落ち込み、再びⅧ期に増加し、Ⅸ期に減少する。これは、遺跡の消長と共通した現象である。ただしⅦ期以降、東濃産の製品は、東海産の製品を完全に凌駕する。

ここで注意しなければならないのは、Ⅴ期以降、消費量にやや増減があるが、東濃の製品は安定的に消費されていることである。しかもこの推移は、吉井地域

や中堀遺跡近隣産の須恵器との消費量の共通性を指摘できる。東濃産の製品の流通経路を考えた場合、鑄川沿いの吉井地域は、共通の通過点である。

近年の(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による、一連の上信越自動車道にかかる発掘調査の成果からも分かるように、この地域では、比較的豊富に東濃地域の製品を消費しており、中堀遺跡へ供給された東濃産灰釉陶器について、経由地の候補のひとつとしてあげておくことができよう。

以上から、灰釉陶器の堅穴式住居跡にみられる消費量の推移をたどると、Ⅰ期からⅢ期にかけては、ほとんどみられなかったが、Ⅳ期以降、急速に出土量を増し、Ⅴ期にピークとなる。そしてⅥ期には、やや消費量が減少するが、それほどではなく、むしろ東濃製品の消費量の上昇にみるように、Ⅴ期の消費量を維持しようとする姿がみられる。これは遺跡の変遷で明らかにするように、遺跡全体を覆う火災(Ⅴ期)以後、何とか旧状に復興しようとする傾向がみられ、大形の建物が構築されたことと一致する現象であろう。

埼玉県内出土の灰釉陶器と中堀遺跡

埼玉県内の灰釉陶器は、浅野晴樹氏の先駆的な研究(浅野1980)や、筆者の集合作業(田中1995)によって、出土遺跡と出土傾向は、明らかとなった。

浅野氏は、折戸53号窯式の灰釉陶器が、「東濃諸窯の灰釉陶器商圏」を通じて、埼玉北部へ流通したことや、埼玉南部には、猿投・三河等の灰釉陶器が流通したこと、そしてそれ以前の製品は、官衙・寺院に供給されたことを明らかにした。

筆者はこれを受け、埼玉県内出土の灰釉陶器の報告例を集成し、遺跡の性格による消費の相違を浮き彫らせ、比較的古い段階では、長頸瓶が圧倒的に多いの対し、新しい段階になると碗・皿が、相対的に増加してくることを指摘した。

とくに中堀遺跡は、従前の関越自動車道の調査でも、多彩な灰釉陶器(長頸瓶5・小瓶5・高台付碗3・高台付皿3・平瓶1・耳皿2)が出土しており、他の平

安時代の集落とは、異なる点が指摘されていた。

ただし前述したように、これまで灰釉陶器の生産地として、あまりにも猿投集落群の東国への流通を過大評価し、静岡産灰釉陶器に対して、軽視していた嫌疑があり、今後再点検していく必要がある。

ちなみに中堀遺跡の灰釉陶器の出土量が、いかに多いかについて、比較参考のために埼玉県内の灰釉陶器の出土遺跡と、出土量の分布図を掲載しておいた。第924図は、埼玉県内、第925図は、児玉地方から出土した灰釉陶器の分布図である。

また第926図では、埼玉・千葉・栃木・茨城の関東4県の各遺跡から出土した灰釉陶器について、その出土点数を遺跡ごとに示した。

ちなみに栃木県の下野国府では、総遺物出土量350箱中、施釉陶器は170点が図化されたが、中堀遺跡では、総遺物出土量650箱中、施釉陶器は27点を図化した。

この図やデータが示すとおり、この4県では、30点以上出土した遺跡が、灰釉陶器をやや豊富に消費した遺跡として目立つ。栃木県下野国府、千葉県永吉台遺跡、埼玉県水川神社他遺跡・稲荷前遺跡・そして中堀遺跡である。

これに引きかえ関東地方の他県では、神奈川県高尾遺跡・海老名本郷遺跡・四ノ宮下郷周辺遺跡・新作小高台遺跡・宮久保遺跡・草山遺跡・三ツ俣遺跡・東耕地遺跡・向原遺跡等、東京都落川遺跡・武蔵国府関連遺跡等、群馬県上野国分寺中間地域・鳥羽遺跡等で灰釉陶器の豊富な出土遺跡を確認することができる。

先に筆者は、国府を除いた灰釉陶器を豊富に出土する遺跡について、遺跡の性格と消費のあり方から次の4形態に分類した。

- ①大規模開発拠点型消費……中堀遺跡
- ②宗教施設型消費……日光男体山山頂遺跡
- ③「市」型消費……田村沖宿遺跡群
- ④手工業集団型消費……榑山遺跡

この中で中堀遺跡は、①大規模開発拠点型消費としたが、その考えは、今も変わらない。すなわち国家や

国、あるいは王親貴族が主導する荒廃田や空閑地の大規模な開発に、被官（家令・佃使等）として在地で直接開発の経営にあたる者達が、第一次的には、良質な焼き物である灰釉陶器を欲し、大量需要に応じて、供給したためであろう。

これを良く示すのは、第54号掘立柱建物跡から出土した灰釉陶器群である。本文中に記したように、第5号柱穴を中心として71点に及ぶ灰釉陶器が出土した。これは、この灰釉陶器を収納していた建物が、焼失倒壊し、第54号掘立柱建物跡を復興した際に、柱の充填土として柱穴へ突き込んだ遺物である。これらは一様に火を受け、火災時の同時性を伺うことができる。

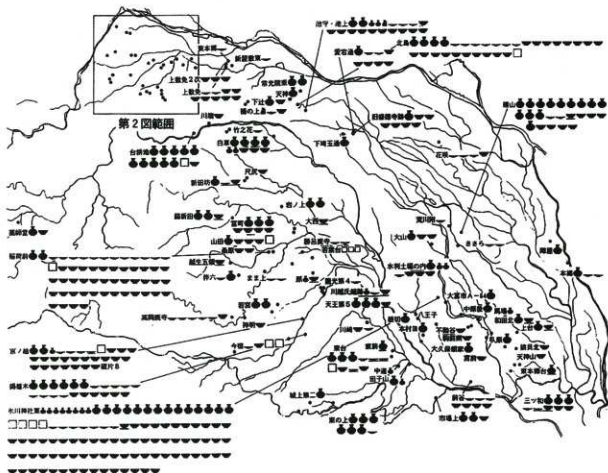
器種構成は、大中小の高台付碗が30点、高台付皿23点、段皿8点、耳皿2点、三足盤1点、長頸壺4点、手付瓶3点である。

灰釉陶器の生産地は、三足盤（16）が、猿投窯跡群産、88（高台付皿）二川窯跡群産、397（高台付碗）・515（高台付皿）が、清々谷窯跡群産と思われる以外は、全て宮口窯跡群産である。

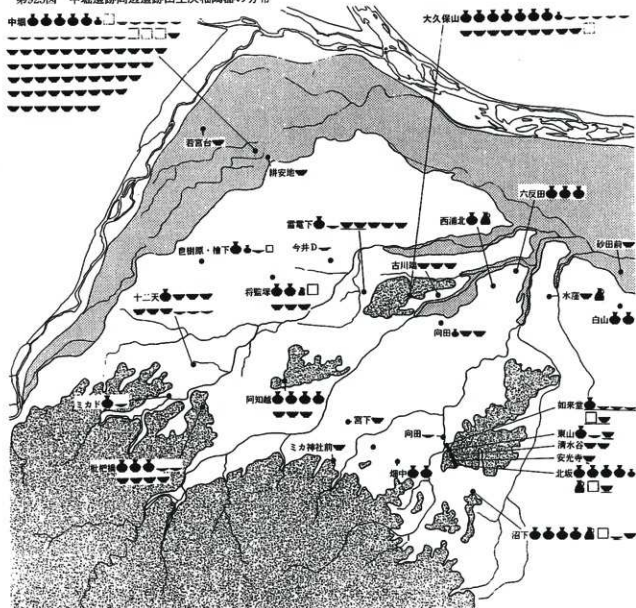
また各窯式は、高台付皿（88・288）の黒笹14号窯式新段階の他は、全て黒笹90号窯式新段階である。つまり90%以上が、宮口窯跡産の黒笹90号窯式新段階の灰釉陶器と言うことになる。しかも底部調整や施釉方法はもちろん、高台や全体の形態の、共通したグループが、少なくとも5から6グループあることとなる。

これは、同一の窯内のバリエーションに取まる程度であり、宮口窯跡群で、おそらく比較的短期間（同時期・一窯分？）に焼成された製品を、一括して入手（購入）し、中掘遺跡の建物内に保管していたためと考えられる。

第924図 埼玉県内出土灰釉陶器の分布



第925図 中堀遺跡周辺遺跡出土灰釉陶器の分布



なお他の産地の製品や古い窯式の製品が混じっていることは、それまでに使用されていた製品が、伝世し混在していたためと考えたい。

ただこれだけでは、中堀遺跡に生活した一部の upper layer のみが、灰釉陶器を使用していたことに留まってしまうが、注目すべきは、この第54号掘立柱建物跡から出土した灰釉陶器と産地、底部調整・施釉方法・高台形態・全体の形状など大変良く類似した、つまり同じ作り手によるものと考えられないような製品が、遺跡内の各遺構から出土している。

たとえば高台付碗の187と186（第248号住居跡）、高台付皿304・305と309（第40号住居跡）などである。これらは、大量に保管された灰釉陶器の一部が、遺跡内の各遺構、とくに竪穴式住居跡へと移動した結果と考えたい。

つまり遺跡の直接の経営者が、大量に入手した灰釉陶器は保管され、ある時点で竪穴式住居跡の住人も、その一部を入手する機会があったことを示す。また破損品は廃棄され、土壌等にまともられたのであろう。

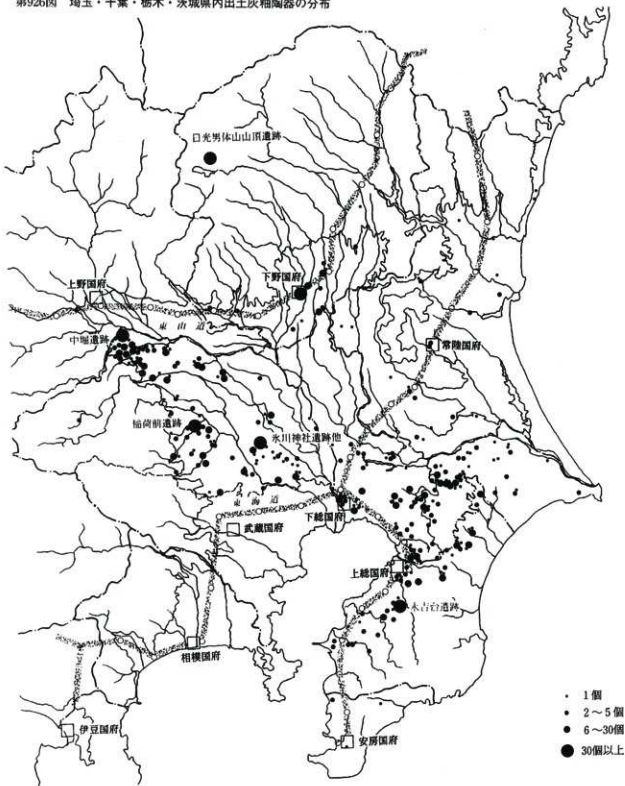
本来は、全てこのように分配し廃棄されていた灰釉

陶器が、保管の状態や分配を復元できたのは、全て中掘遺跡を襲った大きな火災の成せる態といえよう。

また保管された灰釉陶器は、遺跡外へも分配されて

いた可能性も十分考えられる。しかし周辺遺跡の出土例は検証していないので、今後の課題としたい。

第926図 埼玉・千葉・栃木・茨城県内出土灰釉陶器の分布



(8) 鉄鉢形土器

鉢は、古代から僧尼の私有物として認められた食器である。「三衣一鉢」というように、出家した僧尼の持ち物としては、最も基本的で密接な関係にあった。

遺跡から出土した鉄鉢形土器は、僧尼が所持することを許された鉢のうち、瓦鉢と呼ばれるものにあたると考えられる。

鉄鉢形土器は、各地の遺跡から出土しており、中堀遺跡からも6点出土した。そこで今回、東日本出土の鉄鉢形土器を集成した。分布や時期など基本的な考察を加えることにより、地域的な特色などを導き出したい。

1 中堀遺跡の鉄鉢形土器

中堀遺跡では、6点の鉄鉢形土器が出土した。第927図は、中堀遺跡出土の鉄鉢形土器の集成図である。1は第230号住居跡、2は瓦葺き建物区画周辺、3は第13号区画溝、4は第416号土壌、5は第725号土壌、6はグリッドピット(G-4 P50)からそれぞれ出土した。

1~4は、体部から口縁部にかけて大きく開き、口縁部はゆるく「く」の字に曲がる。口唇部は平らに仕上げられている。これらは、後に述べる口縁部の分類

でa類にあたる。いずれも南比企産である。

1は、口径が17.2cmとやや小振りの鉢である。

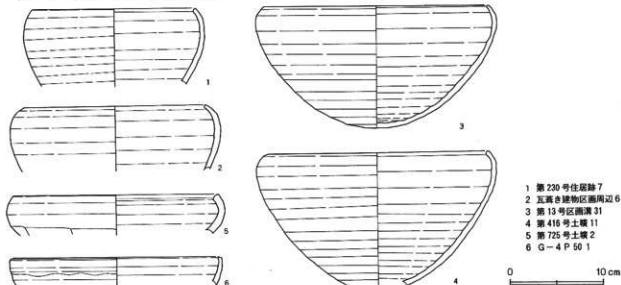
2は口径19cm、3は口径23.9cmである。この二つの鉢は、法量は異なるが、口縁部が先細りとなっている点などよく似ている。出土した場所も、瓦葺き建物区画周辺と建物地業跡を囲む第13号区画溝で、どちらも建物地業跡に関連した遺物と考えられる。ここは寺院が建っていたと推定される場所である。3は底部が残存しており、丸底である。

4は口径23.5cmで、3に近い。底部は欠損するものの、深目である。この鉢が出土した第416号土壌は、貼床が施され、底面に小穴や溝などがみられる土壌で、多量の供膳具や黒色土器、油煙が付着した椀が出土した。

1~4の鉄鉢形土器の時期は、1が9世紀後半、2から4は9世紀前半と考えられる。

5は、上記の4点の鉢とは多少異なる。器厚はやや厚く、口縁部は「く」の字に強く内屈する。口唇部は平らである。a類に分類される。口径は22cmある。この鉢が出土した第725号土壌は、第54号掘立柱建物跡の南庇の南西隅に位置していた。時期は、9世紀前半である。

第927図 中堀遺跡出土鉄鉢形土器集成



6は、灰粘陶器である。口縁部はゆるく内湾しつづつ、直立する。b類に分類できる。口径は22cmである。この鉢は、口縁部をみても鉄鉢形土器の典型的な特徴を備えておらず、また底部は欠損しているため不詳である。そのため鉄鉢形土器であると断言することは難しい。時期は9世紀後半である。

2 研究史

日本では遺存する(伝世した)鉢は多数あり、奈良時代や平安時代の鉢が寺院に所蔵されている。主な鉢は『新版仏教考古学講座』(第5巻)に集成されている(中野1984)。材質は、金銅製・銀製・木製・乾漆製・磁製である。中野政樹氏は、奈良時代と平安時代の鉢の形態を比べ、平安時代の鉢は、器高が若干低く、肩の張りが強いとした。また天平19年に作成された「法隆寺縁起并流資財帳」には、鉢が「仏分」や「聖僧分」などと分かれていたことが書かれ、さらにそれぞれの鉢の数と材質・寸法を記している。これらの記述から鉢が当時供養具や僧具として使用されていた実態を伺えよう。

遺跡から出土した鉢は、ほとんど瓦鉢・磁鉢で、一般的には鉄鉢形土器といわれ、全国各地から出土した。渡辺一氏は、鉄鉢形土器の出現期を検討し、概ね8世紀前半であろうと述べている(渡辺1990)。

また石川安司氏は、鉄鉢形土器は大小2種以上の法量分化の存在を指摘した(石川1995)。

その他にも雨宮龍太郎氏は、千葉県の集落跡から出土した鉄鉢形土器と、その所有者の歴史的性格を仏教史の側面から研究した(雨宮1983)。また郷田良一氏は、鉄鉢形土器が、集落跡の堅穴住居跡から出土していることから、僧尼や仏教の信仰者が、一般的な村落

の構成員である場合があったと述べている(郷田他1980)。

さらに大坪宣雄氏は、神奈川県の宮浜遺跡の分析を行い、鉄鉢形土器など仏教的色彩の濃い遺物から村落内寺院の存在を示している(大坪1995)。また光江章氏は、千葉県愛宕前遺跡の検討から、鉄鉢形土器や「寺」と刻書された坏などの仏教に関係する遺物を出土する遺跡の性格を、近隣の寺院跡と絡めて述べた(光江1986)。

3 分類

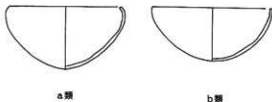
鉄鉢形土器(瓦鉢・磁鉢)の一般的な特徴は、尖底で体部が大きく開き、口縁部で「く」の字に強く内屈することが挙げられる。そこで口縁部の形によって、a類・b類に分類した。a類は、口縁部が「く」の字かそれに近い形に内屈する。b類は口縁部がゆるく内湾するか、直立に近いものである。第928図は、鉄鉢形土器の分類模式図である。

a類で底部の残るのは、ほとんどが尖底かそれに近い丸底で、独楽の形によく似ている。また平底や高台付きも見られる。平底は、最大径に対して底径が小さい鉢と、底径が比較的大きい鉢の二種がみられる。また高台付きの鉢は、尖底や丸底に台を付けた形態が多い。群馬県から比較的多く出土し、他にも栃木県・埼玉県・長野県・愛知県に数例ある。

b類では、平底かそれに近い丸底、または高台の付く鉢が多く、最大径に対する底径が比較的大きい。a類に見られた尖底は、埼玉県の立野遺跡の例などわずかである。

一般的な特徴として、a類は平底があるなど、多少異なる点もあるが、b類は口縁部や底部の形から、鉄鉢形土器である可能性の薄いものも多数存在する。

第928図 鉄鉢形土器分類



4 東日本出土の鉄鉢形土器

東北地方の鉄鉢形土器は、宮城県・福島県から多く出土している。宮城県の多賀城廃寺跡からは、8世紀前半の鉢がまとまって出土した。8世紀前半の例と

しては、他に福島県の上人壇院寺や慧日寺跡、小浜代遺跡でも出土した。また多賀城跡や郡山五番遺跡、関和久上町遺跡などからも出土した。多賀城跡に近い水入遺跡からは、8世紀後半の鉢が出土した。この鉢は波状文が入る珍しい鉢である。また宮城県の間ノ入遺跡の鉄鉢形土器を出土した住居跡の隣の住居から、「佛」と墨書された蓋が出土した。

宮城県では、9世紀前半までが多く、それ以降は、b類が少数みられる程度である。福島県はb類が多く、黒色土器が目立つ。

東北地方の他の地域では、秋田県の秋田城跡で8世紀後半から9世紀後半にかけてa類の鉢が出土した。山形県では、9世紀後半に集中して出土した。また庭田遺跡(出羽国分尼寺?)からは、時期不詳だが1点出土した。岩手県でも主に9世紀後半から10世紀後半に集まっている。上鬼柳Ⅱ・Ⅲ遺跡から出土した時期不明の鉢は、口縁部と底部が欠けている。そのため鉄鉢形土器とは断定できないが、「佛」と刻書されてい

た。なお宮城県例については石川俊英氏、福島県例については菅原祥夫氏に御教示いただいた。

関東地方では、群馬県・埼玉県・千葉県などで多数の鉄鉢形土器が出土している。群馬県は、県南部から多く出土した。7世紀後半のa類には7点あり、他の地域と比べてかなり多い。これらの鉢は、体部が横に張っているものが多い。半田中原・南原遺跡では、口径が30cm近い大きな鉢が出土した。また、荒砥天之宮遺跡では、高台の付いた鉢が出土した。8世紀前半は、a類・b類のほとんどが高台付きの鉢である。上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡では、8世紀前半の鉄鉢形土器がまとめて出土した。また山王廃寺や十三宝塚遺跡・黒熊中西遺跡などの寺院跡からも出土した。とくに十三宝塚遺跡からは、三彩陶器の鉢が出土した。三彩陶器の鉢は珍しく、奈良県の正倉院御物が知られる。また上西原遺跡では、鉄鉢形土器の出土した方形区画内から「寺上」と墨書された坏が出土した。半田中原・南原遺跡でも土坑から「佛」と墨書された碗が

第929図 関東地方北部の鉄鉢形土器出土遺跡



出土した。

埼玉県では、7世紀後半のa類の鉢が、立野遺跡から出土した。またb類の鉢も立野遺跡から出土したが、尖底の度合が強く、他のb類とは異なった形態である。鳩山窯跡群では、8世紀前半から鉄鉢形土器の生産が始まり、9世紀前半まで続く。鳩山窯跡群例は、ほとんどa類に分類され、内屈する口縁部と尖底、あるいは丸底という鉄鉢形土器の特徴を完全に備えている。また鳩山の鉄鉢形土器は、口唇部に面を持つものが多いようである。8世紀前半の鉢は、後の時期に比べると小さめで器高が高い。

9世紀前半には、入間市の八坂前窯跡でも作られていたようである。また埼玉県では、勝呂廃寺跡や高岡

寺院跡でも出土した。その他にも日高市若宮遺跡では、同じ土域内から「寺」と墨書された坏が出土した。

東京都では、7世紀後半から8世紀後半までの出土例は少ない。しかし9世紀後半には、南多摩窯跡群で盛んに生産されたようである。これらの鉢は、鳩山窯跡群と同様a類に分類され、口唇部に面を持つものが多い。

千葉県では、8世紀前半から9世紀後半にかけて多く見られる。とくに9世紀前半から後半にかけて著しく増加し、10世紀前半以降、集落の減少とともに見られなくなる。9世紀前半から後半にかけては、a類に含まれる平底で器高の高い鉢がみられる。長勝寺脇館跡や栗野I遺跡で出土した鉢がこれである。同様の形

第930図 関東地方南部出土の鉄鉢形土器の分布



態の鉢は、他に茨城県のアツノ上遺跡から出土した。また千葉県製の鉄鉢形土器には、黒色土器がいくつかみられる。寺院跡では、小食土塚寺跡から出土した。磯花遺跡では、同一住居跡内から「寺七月？」と墨書された坏が出土した。

茨城県では、a類の鉢は9世紀前半と後半に集まる。アツノ上遺跡の鉢など、深くて底径の小さい点は千葉県製の鉢とよく似ている。また黒色土器の鉢も数例みられる。

栃木県では、a類の鉢は8世紀前半から9世紀後半の鉢が多い。全体的に浅い鉢が多いようである。

神奈川県は、ほとんどがa類の鉢である。8世紀後半から10世紀前半までみられる。平塚市の周辺に集中する。

長野県の鉢は、8世紀後半から10世紀前半に集中する。しかしb類の鉢は、7世紀後半から多数見られる。9世紀前半の中二子遺跡のa類の鉢は、器高が高く、口縁部がほぼ水平に内屈する。この形は、他に例がない。また黒色土器製の鉄鉢形土器も9世紀後半から10世紀前半にかけて出土した。

岐阜県の鉢は、窯跡からの出土が多い。8世紀前半から後半に集中する。また全体的に小形品が多い。

愛知県では、猿投窯跡群・尾北窯跡群から出土がみられる。8世紀後半から9世紀後半にかけての鉢は、ほとんどが猿投窯跡群からの出土である。とくにa類が多い。また三河国分尼寺跡からは、a類の鉢が3点出土した。また大毛沖遺跡では、9世紀後半の灰釉陶器の鉢が出土した。この鉢には、高台が付いている。

静岡県では、吉美中村遺跡と伊場遺跡からの出土が多い。ほとんどb類である。またa類の鉢は、8世紀前半から9世紀前半に集中する。a類の川久保遺跡と伊場遺跡から出土したa類の鉢は、赤彩が施されている。国分寺・国府台遺跡から出土した鉢は、「寺」と墨書されている。また間宮川向遺跡の鉢には、補修の跡と思われる穴が3ヶ所あけられている。

三重県では、恒岡氏城跡から7世紀後半の高台付きの鉢が出土した。a類である。また斎宮跡では、8世

紀前半から9世紀前半にかけて多数出土した。8世紀前半の鉢は丸底で、8世紀後半の鉢は平底の傾向がある。b類の鉢は、いずれも土器器で、器形もa類と大きく異なる。斎宮跡からは、緑釉陶器の鉢も出土した。

北陸地方では、富山県と石川県に多い。富山県は8世紀前半から9世紀前半のa類の鉢が多く、そのほとんどが小杉流通業務団地内遺跡群とその周辺の遺跡からの出土である。石川県は、8世紀前半と9世紀前半に集中する。8世紀前半の鉢はa類が多く、主に正友ヤチヤマ窯跡と庄ヶ屋敷B遺跡からの出土である。また9世紀前半は、若緑ヤキノ窯跡からの出土が目立つ。a類の鉢は、それぞれ大きさが異なり、大中小と量量分化がみられる。また東大寺領横江庄遺跡では緑釉陶器の鉢が出土した。この鉢は時期不詳だが、a類に分類でき、平底である。福井県では、舟場窯跡から9世紀前半の鉢が2点出土した。そのうちの1点は大型である。

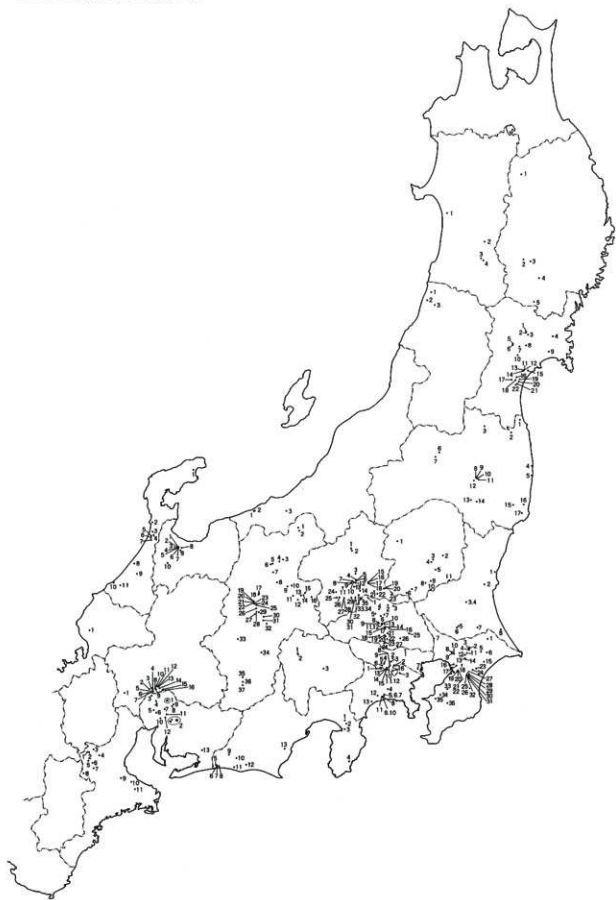
5 まとめ

鉢は、本来サンズクリット語でパートル (patra) といい、鉢多羅・鉢多などに音訳されている。鉢はその略である。仏法に応じた器、供物を受けるに値する人が使う器、腹の分量に応じて食物を取る器であるということから、応器・応量器とも訳されている。僧尼の私有物として認められた食器のことである。古来より「三衣一鉢」といわれ、僧尼の日常必需品である比丘六物、あるいは比丘十八物の一つに数えられている。また仏前に米飯を供えるための供養具としても用いられる。

鉢は、僧尼が乞食(こじき)を行う際に必ず携帯する物である。乞食は、僧尼の修行のひとつで、現在では托鉢ともいう。その形だけまねて、食物を乞うものを乞食(こじき)というようになった。古代の日本では、僧尼令に規定があり、乞食は精進練行の目的以外で行うことは禁じられ、許可制であった。

僧尼の使用する鉢は、材料・色・大きさなどが、律によって定められている。

第931図 東日本出土の鉄鉢形土器



第 683 表 東日本出土の鉄針形土器集成 (2)

No.	市町村	遺跡名	遺 積	No.	市町村	遺 跡 名	遺 積	No.	市町村	遺 跡 名	遺 積
12	埼玉県鳩山町	広町B地区	第12号遺	5	千葉県芝山市	庄作	SJ10	6	東京都八王子市	南多摩遺跡群	G28号塚原
	埼玉県鳩山町	広町B地区	第6号遺状遺跡	5	千葉県芝山市	庄作	SJ30	6	東京都八王子市	南多摩遺跡群	G28号塚原
	埼玉県鳩山町	広町B地区	第11号遺	6	千葉県茨城市	南信吉		6	東京都八王子市	南多摩遺跡群	G28号塚原
	埼玉県鳩山町	広町B地区	第14号遺	7	千葉県流山市	北谷津第II	SJ43住	6	東京都八王子市	南多摩遺跡群	G28号塚原
	埼玉県鳩山町	広町B地区	第13A・B号遺	8	千葉県八千代市	丹戸向	D127号住	6	東京都八王子市	南多摩遺跡群	G28号塚原
	埼玉県鳩山町	広町B地区	第3号遺	9	千葉県八千代市	日積前	D142住	6	東京都八王子市	南多摩遺跡群	G25-C号塚原
	埼玉県鳩山町	広町B地区	第3号遺	9	千葉県八千代市	日積前	D069住	6	東京都八王子市	南多摩遺跡群	G28号塚原
	埼玉県鳩山町	広町B地区	第3号遺	10	千葉県八千代市	村上	033住	6	東京都八王子市	南多摩遺跡群	G28号塚原
	埼玉県鳩山町	広町B地区	第3号遺	11	千葉県匝々町	長藤寺臨園	001住	6	東京都八王子市	南多摩遺跡群	G28号塚原
	埼玉県鳩山町	広町B地区	灰層	12	千葉県匝々町	高野大山	遺構外	6	東京都八王子市	南多摩遺跡群	G28号塚原
	埼玉県鳩山町	広町B地区	灰層	13	千葉県匝々町	野野1	028住	6	東京都八王子市	南多摩遺跡群	G25-C号塚原
	埼玉県鳩山町	小谷B地区	第6号遺	14	千葉県匝々町	立山	SD2				
	埼玉県鳩山町	小谷B地区	第6号遺	15	千葉県松尾町	八田太田台	SJ031	6	東京都八王子市	南多摩遺跡群	粘土採掘坑
	埼玉県鳩山町	小谷B地区	第8号遺	15	千葉県松尾町	八田太田台	第2テラス	7	東京都品川区	大井遺跡	SJ18
	埼玉県鳩山町	小谷B地区	第8号遺	16	千葉県千葉市	砂子	SJ14	8	東京都町田市	多摩ニュークワンNo.431・452	遺構外
	埼玉県鳩山町	小谷B地区	第8号遺	17	千葉県千葉市	立木南	SJ36	8	東京都町田市	多摩ニュークワンNo.271・452	遺構外
	埼玉県鳩山町	小谷C地区	灰層	17	千葉県千葉市	立木南	SJ39	8	東京都町田市	多摩ニュークワンNo.271・452	遺構外
	埼玉県鳩山町	小谷C地区	SJ6	18	千葉県千葉市	宇津志野遺跡	1A号室跡室内	8	東京都町田市	多摩ニュークワンNo.271・452	遺構外
	埼玉県鳩山町	小谷C地区	SJ2	18	千葉県千葉市	宇津志野遺跡	1A号室跡厨下	8	東京都町田市	多摩ニュークワンNo.271・452	遺構外
	埼玉県鳩山町	柳原A地区	320号粘土採掘坑	19	千葉県千葉市	稲名崎	西ノ原1号墳	8	東京都町田市	多摩ニュークワンNo.271・452	遺構外
	埼玉県鳩山町	柳原A地区	446号粘土採掘坑	20	千葉県千葉市	稲名崎1号墳	SJ1	8	東京都町田市	多摩ニュークワンNo.271・452	遺構外
	埼玉県鳩山町	柳原A地区	土器捨て場	21	千葉県千葉市	ムコアラク	DW20住	9	東京都町田市	多摩ニュークワンNo.431・452	S D1
	埼玉県鳩山町	柳原B地区	SD1	22	千葉県千葉市	六通	5号住				
	埼玉県鳩山町	柳原B地区	SJ26	22	千葉県千葉市	六通	5号住	9	東京都町田市	多摩ニュークワンNo.431・452	S D1
	埼玉県栗原山市	立野	SJ2	23	千葉県栗原市	砂鉢	092B住	10	東京都町田市	多摩ニュークワンNo.145	S J 6
	埼玉県栗原山市	立野	グリップ	24	千葉県栗原市	SJ131					
	埼玉県栗原山市	立野	グリップ	24	千葉県栗原市	作畑	SJ134	11	東京都町田市	多摩ニュークワンNo.206	配石遺構
	埼玉県栗原山市	立野	グリップ	24	千葉県栗原市	作畑	SJ21				
	埼玉県栗原市	尾茂	SJ28	25	千葉県千葉市	大権第2	SJ6	12	東京都町田市	多摩ニュークワンNo.342	1号室
	埼玉県栗原市	稲荷前A区	SJ78	26	千葉県千葉市	坂ノ越	第6号住居兼工所跡	12	東京都町田市	多摩ニュークワンNo.342	1号室
	埼玉県栗原市	稲荷前B区	SJ39	26	千葉県千葉市	坂ノ越	第5号円形築	12	東京都町田市	多摩ニュークワンNo.342	1号室
	埼玉県栗原市	稲荷前B区	SK54	26	千葉県千葉市	坂ノ越	第7号住居兼工所跡	13	東京都町田市	小山田No.15	HT-3
	埼玉県栗原市	勝呂崎F地区	SJ1	26	千葉県千葉市	坂ノ越	SJ5	14	東京都町田市	小山田No.27	HT-5
	埼玉県栗原市	勝呂崎F地区	SJ2	27	千葉県千葉市	南河原第2	SJ5	15	東京都町田市	小幡中学校	SJ4
	埼玉県栗原市	若宮	SJ1	28	千葉県大網白里町	大網山台遺跡群No.6地点	H-251住	16	東京都町田市	川島谷遺跡群	第9地点SJ3
	埼玉県高崎市	高岡寺院跡	第3建物遺構・特殊遺構	29	千葉県千葉市	小犬土塚寺跡	SJ1	16	東京都町田市	川島谷遺跡群	第12地点SJ2
	埼玉県高崎市	高岡寺院跡	第3建物遺構・特殊遺構	30	千葉県大網白里町	南交台	H-055住	2	神奈川県相模原市	稲原二木松	
	埼玉県高崎市	赤宮第3次	SK	31	千葉県大網白里町	砂田中台	069A号住	2	神奈川県川崎市	宮底	5a号住
	埼玉県高崎市	光由	SJ32	32	千葉県茂原市	内野第II	SJ18	3	神奈川県川崎市	宮底S地区	S-3号住
	埼玉県狭山市	今宿	SJ31	32	千葉県茂原市	内野第I	SJ18	3	神奈川県横浜市	上谷本第2地区	SJ14
	埼玉県狭山市	森坂北	SJ2	32	千葉県茂原市	内野第I	SJ19	4	神奈川県横浜市	内野第I	SJ20
	埼玉県狭山市	八取前遺跡	灰層	33	千葉県松戸市	渡守屋	SJ3	6	神奈川県平塚市	四之宮下郷	1区S207
	埼玉県狭山市	八取前遺跡	灰層	33	千葉県松戸市	渡守屋	SJ7	7	神奈川県平塚市	西之宮天神	S206
	埼玉県大宮市	永天神社東	SJ18	33	千葉県松戸市	渡守屋	SJ7	8	神奈川県平塚市	山王A	5号遺状遺構
	埼玉県大宮市	永天神社東	SJ10	33	千葉県松戸市	渡守屋	SJ7	9	神奈川県平塚市	山王B	
	埼玉県上野市	松山	SJ9	34	千葉県水戸市	花山	SJ91	10	神奈川県平塚市	神保久保(第1塚)	C-1号丹井
	千葉県原市	藤花	SJ12	35	千葉県水戸市	花山	SJ36				
	千葉県原市	公津原	069号住	36	千葉県沼津市	常代	SK63	10	神奈川県平塚市	神保久保(第4塚)	SK3
	千葉県原市	公津原	012号住	1	東京都練馬区	丸山東	遺構外	11	神奈川県平塚市	中原御殿D	SD16
	千葉県原市	公津原	068号住	2	東京都国立市	南栗寺	SJ35	12	神奈川県平塚市	西原	SJ105
	千葉県原市	公津原	012号住	2	東京都国立市	南栗寺	SJ35	13	神奈川県小田原市	羽根尾塚ノ上	SJ3
	千葉県原市	飯田町南野	SJ1	3	東京都日野市	落川	遺構跡部				
	千葉県原市	飯田町南野	SJ1	4	東京都八王子市	打越大畑	H1号住	1	新潟県糸川市	岩野1	遺構外
	千葉県原市	大森山第2B地区	SJ53	5	東京都八王子市	大塚D	SJ16	2	新潟県糸川市	小田越	遺構外
	千葉県原市	大森山第2B地区	SJ29	6	東京都八王子市	南多摩遺跡群	A区第1地点	2	新潟県糸川市	小田越	遺構外
	千葉県原市	大森山第2B地区	SJ29	6	東京都八王子市	南多摩遺跡群	粘土採掘坑	3	新潟県新井市	栗原	S D25
	千葉県原市	大森山第2B地区	SJ29	6	東京都八王子市	南多摩遺跡群	G25-C号塚原	3	新潟県新井市	栗原	S D25

